

# 鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅳ

昭和63年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

1989年3月

## 序

鹿児島大学の敷地における埋蔵文化財発掘調査の成果を取りまとめた、調査室年報Ⅳ（昭和63年度）を発刊する運びとなった。

現在鹿児島大学は、郡元・宇宿及び下荒田の3つのキャンパスを主体とし、これにくっかの付属地を加えて構成されている。これまでの発掘調査により、郡元地区では縄文前期から中世にいたる間の遺跡・遺物が埋蔵されていることが明らかになっている。宇宿地区でも昭和61年度から調査室による発掘調査が行われるようになったが、今年度の調査で縄文早期の遺物が出土した。また遠く離れた入来牧場においても縄文期と見られる石器・土器が見出されている。

今回の年報に含まれる昭和63年2月から平成元年1月までの間には、本調査はなかったが、試掘調査3件と立合調査5件が実施された。

昭和60年に調査室が発足してからの4年間に、本調査5件、試掘調査9件、工事に伴う立合調査24件を処理してきた。少ない陣容と限られた予算の中で、これだけの業務をこなしておられる調査室の諸氏に敬意を表すると共に、貴重な研究費の中から経費を捻出して調査室の運営に協力して頂いている全学の関係者に謝意を表するものである。

平成元年3月

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会  
委員長 難波直彦

## 例 言

1. 本年報は鹿児島大学構内において鹿児島大学埋蔵文化財調査室が昭和63年2月1日から平成元年1月31日までに行った調査研究活動の成果をまとめたものである。調査報告は昭和62年度分（昭和62年2～3月）を第Ⅰ部、昭和63年度分（昭和63年4月～平成元年1月）を第Ⅱ部とする。
2. 昭和60年6月1日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査に便であるように鹿児島大学構内座標を郡元団地と宇宿団地とに設置した。  
その設置基準は以下のようである。
  - (1) 郡元団地では、国土座標第2座標系（ $X = -158,200$ ,  $Y = -42,400$ ）を基点として一辺50mの方形地区割を行った。（図版1参照）。
  - (2) 宇宿団地では、国土座標第2座標系（ $X = -161,600$ ,  $Y = -44,400$ ）を基点として一辺50mの方形地区割を行った。（図版2参照）。
3. 本年報で報告を行った試掘調査地点については、図版1・2にその位置を示している。
4. 付編Ⅰを除く本年報の執筆は、松永幸男が行った。また、本年報掲載の遺構実測図は、松永・金子千穂枝・砂田光紀によるものである。遺物の実測、遺構・遺物の製図は松永・砂田が行った。遺構・遺物の写真撮影は砂田が行った。
5. 教育学部福利厚生施設建て替え予定地における試掘調査、並びに教育学部教育実践研究指導センター及び美術・音楽科棟建設予定地における試掘調査においては、宮崎大学農学部藤原宏志助教授にプラント・オパール資料の採取・分析を依頼し、併せて玉稿を賜ることができた。記して、深甚の謝意を表したい。なお、これらの分析結果については、付編Ⅰとして本年報に掲載している。
6. 付編Ⅱとして昭和62年10・11月に実施された情報処理センター新宮通信設備工事に伴う立合調査の際に検出された遺物の報告を行っている。なお、本立合調査の概要については、『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲ』を参照いただきたい。
7. 本年報の編集は、上村俊雄の指導を受けて鹿児島大学埋蔵文化財調査室が行った。

# 目 次

第Ⅰ部 昭和62年度（昭和63年2～3月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告	
第1章 昭和62年度（昭和63年2～3月）調査の概要	3
第2章 鹿児島大学郡元団地O-7区における試掘調査報告	4
1. 調査に至る経過	4
2. 調査の経過	5
3. 層序	5
4. 遺構	8
5. 遺物	8
6. まとめ	9
第3章 昭和62年度（昭和63年2～3月）鹿児島大学構内における立合調査報告	10
第Ⅱ部 昭和63年度（昭和63年4月～平成元年1月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告	
第1章 昭和63年度（昭和63年4月～平成元年1月）調査の概要	13
第2章 鹿児島大学郡元団地P-4・5区における試掘調査	14
1. 調査に至る経過	14
2. 調査体制	14
3. 調査の経過	15
4. 調査報告	15
5. まとめ	23
第3章 鹿児島大学宇宿団地E-8区における試掘調査報告	24
1. 調査に至る経過	24
2. 調査体制	24
3. 調査の経過	24
4. 層序	25
5. 遺物	27
6. まとめ	28
第4章 昭和63年度（昭和63年4月～平成元年1月）鹿児島大学構内における立合調査報告	29
・鹿児島大学構内遺跡調査要項	34
・受贈図書目録	37

付 編

I. 鹿児島大学構内遺跡（郡元団地O-7区、郡元団地P-4・5区）に  
おけるプラント・オパール分析結果 ..... 49

II. 情報処理センター新営通信設備工事に伴う立合調査時出土遺物の紹介 ..... 54

挿 図 目 次

・郡元団地O-7区における試掘調査

第1図 調査地点位置図 ..... 4

第2図 各トレンチ土層図 ..... 6

第3図 No.2・3トレンチ検出遺構 ..... 8

第4図 出土土器 ..... 9

・昭和62年度立合調査

第5図 胸像台座工事立合調査位置図 ..... 10

・郡元団地P-4・5区における試掘調査

第6図 調査地点位置図 ..... 14

第7図 No.1トレンチ土層図 ..... 16

第8図 No.1トレンチ出土土器 ..... 16

第9図 No.1トレンチ層位別出土土器分布図 ..... 17

第10図 No.2トレンチ土層図 ..... 18

第11図 No.2トレンチ層位別出土土器分布図 ..... 19

第12図 No.2トレンチ出土土器 ..... 20

第13図 No.3トレンチ土層図 ..... 20

第14図 No.3トレンチ第3層出土土器分布図 ..... 21

第15図 No.3トレンチ出土土器 ..... 21

第16図 No.4トレンチ土層図 ..... 21

第17図 No.4トレンチ層位別出土土器分布図 ..... 22

第18図 No.4トレンチ出土土器 ..... 23

・宇宿団地E-8区における試掘調査

第19図 調査地点位置図 ..... 25

第20図 No.1・2トレンチ土層図 ..... 26

第21図 第2・3層出土土器 ..... 27

第22図 第5層出土土器 ..... 28

・昭和63年度立合調査

第23図	工学部焼却場立合調査地点位置図	29
第24図	農学部電気幹線整備工事立合調査地点位置図	30
第25図	農学部電気幹線整備工事に伴う立合調査時観察土層柱状図	31
第26図	農学部農学科等消化栓設備改修工事立合調査位置図	32
第27図	農学部農学科等消化栓設備改修工事に伴う立合調査時観察土層柱状図	32
第28図	郡元地区自家給水施設改修工事立合調査位置図	33
	・鹿児島大学構内遺跡におけるプラント・オパール分析	
第29図	郡元団地O-7区におけるプラント・オパール定量分析結果グラフ	52
第30図	郡元団地P-4・5区におけるプラント・オパール定量分析結果グラフ	53
	・情報処理センター新営通信設備工事に伴う立合調査	
第31図	出土土器(1)	55
第32図	出土土器(2)	56
第33図	出土土器(3)	57

## 写真目次

写真1	胸像台座設置工事作業状況	10
写真2	胸像台座設置工事完掘状況	10

## 表目次

表1	郡元団地O-7区におけるプラント・オパール定量分析結果	50
表2	郡元団地P-4・5区におけるプラント・オパール定量分析結果	51

## 図版目次

1.	鹿児島大学郡元団地構内図	61
2.	鹿児島大学宇宿団地構内図	62
3.	郡元団地O-7区における試掘調査	63
	① No.1 トレンチ東壁土層	
	② No.2 トレンチ北壁深掘り部土層	
	③ No.3 トレンチ北壁中央部土層	
	④ No.3 トレンチ第3層上面検出溝状遺構	
	⑤ プラント・オパール分析資料採取状況	
	⑥ 出土土器	
4.	郡元団地P-4・5区における試掘調査(1)	64

① No.1 トレンチ東壁土層	② No.3 トレンチ東壁土層	
③ No.4 トレンチ東壁土層	④ No.2 トレンチ硬質土上面検出溝状遺構	
⑤ No.4 トレンチ第6層上面検出溝状遺構・ピット列		
5. 郡元団地P-4・5区における試掘調査(2)	.....	65
① No.1 トレンチ出土土器	② No.2 トレンチ出土土器	
③ No.3 トレンチ出土土器	④ No.4 トレンチ出土土器	
6. 宇宿団地E-8区における試掘調査	.....	66
① 調査区近景	② 調査区遠景	
③ No.1 トレンチ西壁土層	④ No.2 トレンチ南壁土層	
⑤ No.2 トレンチ第5層遺物出土状況	⑥ 第2・3層出土土器	
⑦ 第5層出土土器		
7. 昭和63年度立合調査	.....	67
① 農学部電気幹線工事C地点土層	② 農学部電気幹線工事L地点土層	
③ 農学部消化栓改修工事No.4地点土層	④ 工学部焼却場立合時観察土層	
⑤ 農学部消化栓改修工事状況		
8. 情報処理センター新営通信設備工事に伴う立合調査(1)		
出土土器(1)	.....	68
9. 情報処理センター新営通信工事に伴う立合調査(2)		
出土土器(2)	.....	69

第 I 部 昭和62年度（昭和63年 2 ～ 3 月）  
鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

- 第 1 章 昭和62年度（昭和63年 2 ～ 3 月）調査の概要
- 第 2 章 鹿児島大学郡元団地 O - 7 区における試掘調査報告
- 第 3 章 昭和62年度（昭和63年 2 ～ 3 月）鹿児島大学構内における  
立合調査報告



## 第1章 昭和62年度（昭和63年2～3月）調査の概要

昭和63年2～3月においては下記の試掘調査（1件）及び立合調査（1件）を実施した。

### ・試掘調査

教育学部福利厚生施設建て替え予定地における埋蔵文化財試掘確認調査（昭和63年3月22～24・28日、郡元団地O-7区）

### ・立合調査

工学部岩崎與八郎氏胸像台座工事（昭和63年2月22日、郡元団地I-12区）

鹿児島大学教育学部構内は過去において、教育学部グラウンド（県立医大遺跡）・附属中敷地内・第2体育館建設地・実習棟・文科研究棟（水町遺跡）・附属農場・現食堂北側等で発掘調査が行われている。これらの調査によって縄文時代晩期から近世にかけての遺物が検出されているが、附属中学校敷地内においては良好な成川式土器包含層が存在し該期の住居址も検出されているのに対し、教育学部構内の中央に位置する水町遺跡においては該期の包含層は薄くその時代的な中心が中近世にあることなどを考えると、教育学部構内各地点においてその時代的な中心が若干異なるようである。

今回、教育学部福利厚生施設建て替え予定に伴い試掘調査を行った地点は教育学部構内でも北半部のはぼ中央に位置する部分で、先述の水町遺跡の北約75mに位置する。当初は本地点においても水町遺跡と同様な様相が認められることが考えられたが、予想に反し本地点においてはかなり良好な成川式土器包含層が存在することが確認されることとなった。遺物の点数自体はさほど多くはなかったものの中近世の遺物も出土しており、また、プラント・オパール分析の結果から水田址の存在も指摘されている。今後、教育学部構内においては構内の南西部に広がる成川式土器包含層と理学部から教養部にかけて広がる同層との関係を把握することが必要であろうし、また、各地点でプラント・オパール分析によって存在が確認されている水田址を考古学的に検出すること及びその拡がりを抑えること等が課題となろう。将来実施されるであろう本地点における本調査はこれらの課題に対して良好な資料を提供してくれるものと考えられる。

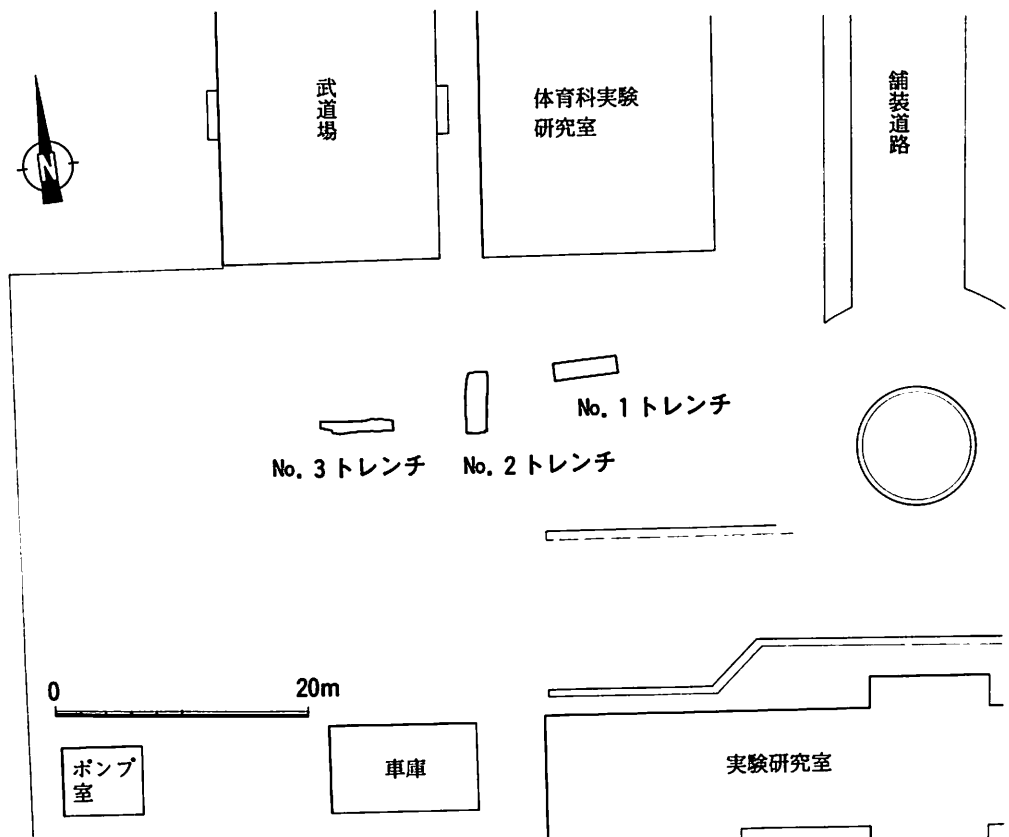
工学部において実施された岩崎與八郎氏胸像台座工事は、当該地点に厚い客土が存在していたため、埋蔵文化財包含層に何ら影響を与えることはなかった。

## 第2章 鹿児島大学郡元団地0-7区における試掘調査報告

### 1. 調査に至る経過

鹿児島大学では、現在の老朽化した教育学部福利厚生施設の建て替えを計画しているが、今回、その建て替え予定地として武道場南側の463㎡が候補にあげられることとなった。当該地は古代・近世の水田址及び溝が検出された水町遺跡の北約80mに位置し、水田址等の諸遺構が本地点まで拡がる可能性が考えられた。このため鹿児島大学埋蔵文化財調査室では教育学部福利厚生施設建て替え予定地において、埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を実施することとなった。調査は下記の体制で、昭和63年3月22～28日に行った。

調査主体者 鹿児島大学長 井形昭弘



第1図 調査地点位置図 (1/600)

調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室  
室長 上村俊雄  
室員 松永幸男・金子千穂枝・坪根伸也

#### 作業員

東條フミ・野下セツ子・野下ヨブ子・原口オウト・前田スガ・脇タミ子・脇ツルエ・脇俊子

## 2. 調査の経過

今回の調査においては、南北方向に長軸をとる2m×5mのトレンチを間に挟んで、西側に1m×6mの、東側に1m×5mの東西方向に延びるトレンチを設定している（第1図）。建設予定地のほぼ中央に並ぶこれらのトレンチを、東から西にNo.1～3トレンチと呼称した。

何れのトレンチも客土を重機によって除去したが、その結果No.1トレンチにおいては東端部を除いて約1.2mの深さまで既に攪乱を受けていることが判明した。このため本トレンチ東端部に深掘部を設定することとし、No.1トレンチについては重機によって約2.3mの深さまで掘下げた後、土層観察を行う東壁部を除いて埋め戻しを行った。

調査の結果、No.1トレンチでは14層が、No.2トレンチでは9層が、そしてNo.3トレンチにおいては12層が認められている。これら3トレンチ間の土層の対応関係は残念ながら明確にできなかったが、No.1トレンチの第2・3・4層がNo.2トレンチの第7・8・9層に対応し、No.2トレンチの第4・5c層がNo.3トレンチの第3・8層に対応するようである。

これらの土層のうちNo.2トレンチの第2層から中近世の遺物が、同トレンチの第4層及びNo.3トレンチの第3層から成川式土器が主に出土している。ただし、後者からは白磁も一点出土しており、同層の時期については成川式土器期よりも降る可能性が高い。また、No.3トレンチにおいては、第3層上面に肩部をもちほぼ南北方向に延びる幅12cmほどの溝状遺構が検出されたほか、第5層上面では径12cm～20cmのピットも検出されている。

以上のほか、今回の調査においては、宮崎大学農学部藤原宏志助教授によって、No.1トレンチ東壁、及びNo.2トレンチ深掘り部西壁からプラント・オパール分析資料の採取が行われた。同資料については、藤原助教授に分析を依頼した。

## 3. 層序（第2図）

前節で述べたように今回の調査においては、各トレンチ間の土層の対応関係を十分に把握することができなかった。そこで、本節においては、便宜的にトレンチごとに層序の説明を行いたい。なお、対応関係が確認できた土層については、前節で述べたとおりである。

### (1) No.1トレンチ

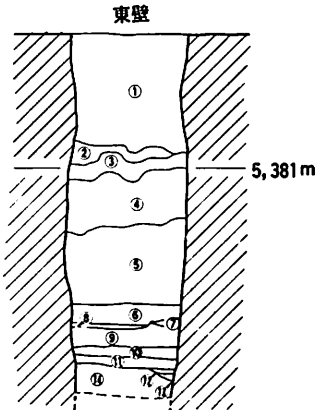
第1層 客土

第2層 黒褐色砂混じりシルト層

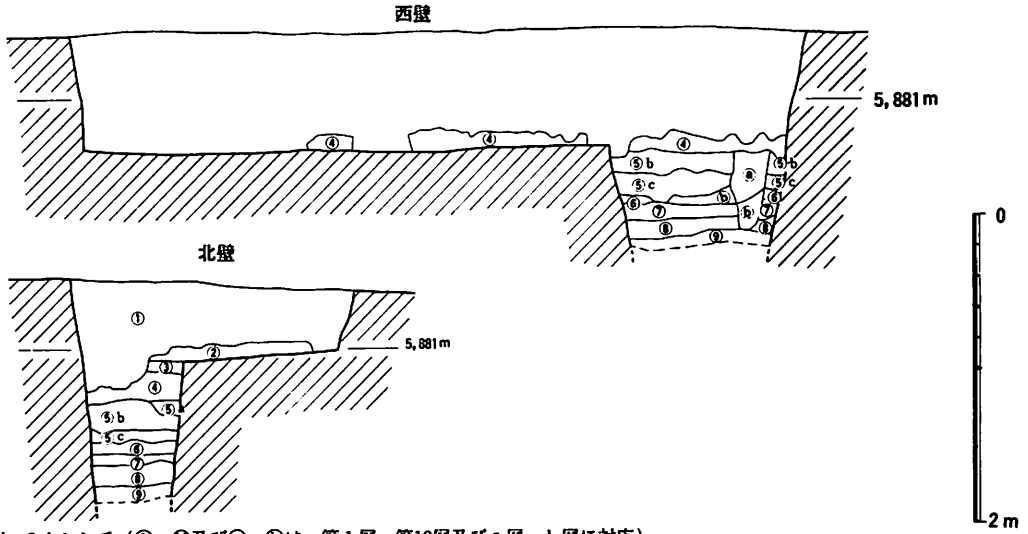
第3層 濁灰褐色砂混じりシルト層（砂を多く含む）

第4層 淡濁灰褐色砂層（若干シルトを混じえており、径5cm以上の軽石を含む）

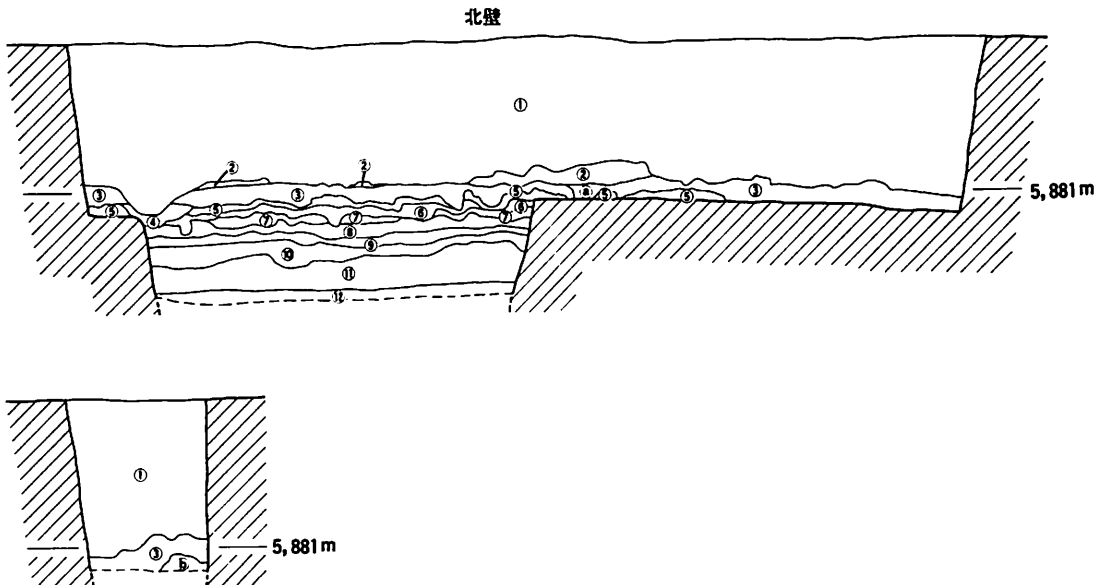
No. 1 トレンチ (①~⑭は第1層~第14層に対応)



No. 2 トレンチ (①~⑨及び⑩・⑪は、それぞれ第1層~第9層及びa層・b層に対応)



No. 3 トレンチ (①~⑫及び⑬・⑭は、第1層~第12層及びa層・b層に対応)



第2図 各トレンチ土層図 (1/50)

- 第5層 第4層土と白色砂との混砂層
- 第6層 淡黄白色砂層（10cm大の軽石を含む）
- 第7層 黄白色砂層（黄白色軽石が水分を含んで潰れたものを含む）
- 第8層 1cm大の軽石からなる層（軽石の表面は黒褐色の付着物で覆われる）
- 第9層 褐色の軽石礫（径3～5cm）からなる層（軽石は水分を含んでもろく、中央の軽石は第8層のものと同様に黒褐色の付着物で覆われる）
- 第10層 淡灰褐色褐色軽石礫（径1～5cm大）層
- 第11層 淡褐色砂層
- 第12層 濁褐色軽石小礫（径1～1.5cm）層
- 第13層 淡灰色粘質土ブロック（軽石が潰れてできた可能性も考えられる）
- 第14層 褐色～暗褐色砂層（水成作用を受けたためか、暗褐色の薄砂層が縞状にみられる）

(2) №2 トレンチ

- 第1層 客土
- 第2層 濁灰褐色砂混じりシルト層（火山灰二次堆積）
- 第3層 明褐色砂混じりシルト層（火山灰二次堆積）
- 第4層 灰褐色シルト質土層（鉄分の浸透が認められる）
- 第5a層 灰褐色シルト質土（第4層よりも色調が濃く、細砂を若干含む）
- 第5b層 灰褐色シルト質土（第4層よりも色調が濃い）
- 第5c層 粗砂混じり灰茶褐色シルト質土（5b層土に粗砂が混じり、鉄分が浸透している）
- 第6層 粗砂を大量に含む灰褐色シルト質土層（色調は第4層に近い）
- 第7層 暗灰色粗砂混じりシルト層（白色の軽石粒を含む）
- 第8層 淡灰褐色シルト質土層（粗砂を多量に含んでいる）
- 第9層 淡灰白色粗砂層

a層 灰褐色シルト質土層（砂を若干含み、鉄分の浸透がみられる）

b層 a層よりもやや色調が暗い灰褐色を呈する砂混じりシルト質土層

(3) №3 トレンチ

- 第1層 攪乱層
- 第2層 青灰色砂質シルト層
- 第3層 灰色砂混じりシルト層
- 第4層 第3層土と第5層土の小ブロックからなる混土層
- 第5層 褐色砂混じり粘土層
- 第6層 淡褐色砂層
- 第7層 濁褐色砂混じりシルト層
- 第8層 粗砂混じり灰褐色シルト層

- 第9層 灰褐色砂混じりシルト層
- 第10層 粗砂と軽石礫を多量に含んだ灰色シルト層
- 第11層 軽石礫と粗砂からなる層
- 第12層 褐色砂層

- a層 淡青灰色シルト層（溝状遺構の埋土に相当）
- b層 暗灰色粘質シルト層

#### 4. 遺構（第3図）

小範囲の調査であるため性格等については明らかにできなかったものの、No.2トレンチ及びNo.3トレンチにおいて溝状遺構・ピット等を検出している。両トレンチにおいては個別に土層番号を付しているため、以下では、混乱を生じないようにトレンチ別に遺構の説明を行う。

##### (1) No.2トレンチ検出遺構

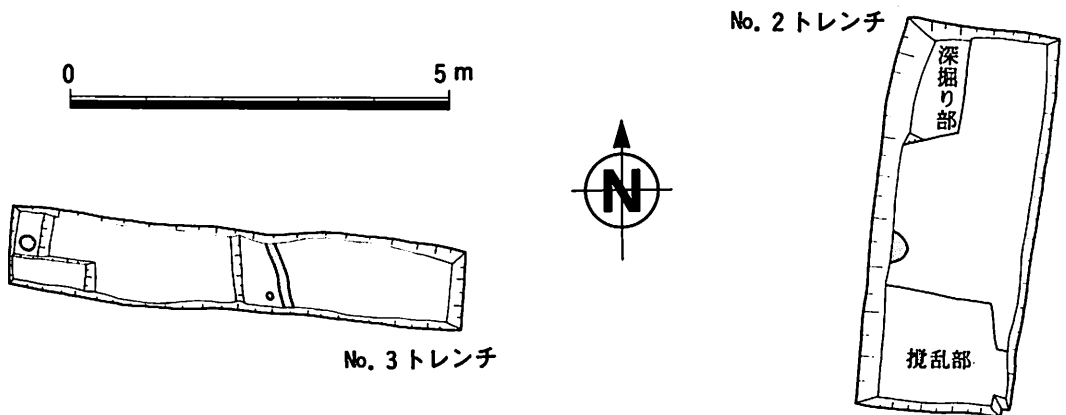
第4層上面において、径約50cmのピットを検出している。本ピットは成川式土器包含層である第4層上面において検出されていることから、成川式期以後の所産であることが考えられる。また、下限についても上方に中近世の遺物包含層が存在することからおおよそ該期に比定されよう。

##### (2) No.3トレンチ検出遺構

第3層上面においてほぼ南北方向に延びる幅12cmほどの溝状遺構を、また第5層上面において径20cmほどのピットを検出している。溝状遺構が検出された第3層は成川式土器を主体とする包含層ではあるが、一片ではあるものの白磁の出土もみられており、成川式期よりもかなり降る時期の形成である可能性が高い。第5層上面検出のピットについては時期判断の決め手を欠いている。

#### 5. 遺物（第4図）

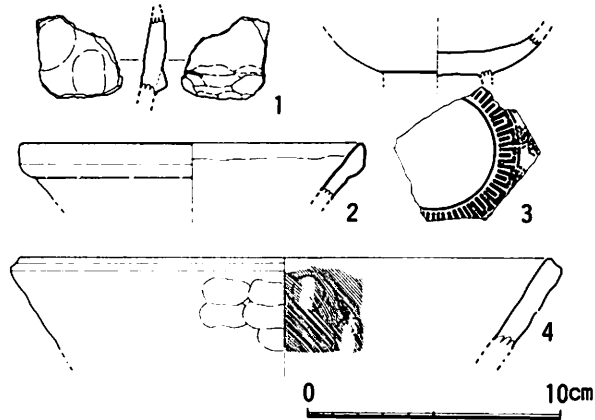
今回の調査においては小面積の調査にもかかわらず、土器を中心として多数の遺物が出土している。ただ、きわめて小さい破片が多かったため、図化が可能なものは少なかった。第4図には土器



第3図 No.2・3トレンチ検出遺構 (1/100)

を4点図示している。

1はNo.2トレンチ第4層から出土した成川式土器である。若干内湾する甕の口縁部分にあたり、肩部にはいわゆる「絡縄突帯」が貼付されている。2はNo.3トレンチ第4層出土の白磁片で、玉縁状を呈する碗の口縁部片である。釉・磁胎ともに若干濁った白色を呈



第4図 出土土器 (1/3)

し、磁胎には黒色の極めて微細な粒が含まれている。3は染め付けの底部付近の破片で、内面見込みには輪状に無袖部が残されており、そこに重ねられた高台の痕跡が残っている。4は、復元径が20cmほどの鉢の口縁部片である。おそらく底部から口縁部にかけて胴部が直線的に延びるものと考えられる。須恵質の土器で内面には斜位のハケメが認められるが、外面はユビオサエの後をあまり丁寧ではないナデ調整で仕上げている。

## 6. まとめ

今回の調査においては古墳時代以降、及び中近世の遺物包含層が検出されている。前者については所属時期の確定はできなかったものの、後者との間には無遺物層を挟んでおり、その堆積状況は良好であった。遺物の出土量も小範囲の調査ながら、かなりの量が認められた。また、遺構としては、性格は不明ながら、南北に延びる溝状遺構のほか、ピットも検出されている。さらに、本調査地点の南側約80mに位置する水町遺跡の調査結果から考えて、No.1・2トレンチにおいて実施されたプラント・オパール分析によって本地点においても数層の水田層が存在することが示されている(付編I参照)。

以上のような調査結果から、本地点において何らかの現状変更が行われる場合には、事前に埋蔵文化財に対する十分な配慮を行う必要があるものと判断される。

### 第3章 昭和62年度（昭和62年2月～3月）鹿児島大学構内における立合調査

昭和62年度（昭和62年2月1日～3月31日）においては、以下の工事に伴って立合調査を実施した。

- ・工学部岩崎與八郎氏胸像台座工事（昭和63年2月22日，郡元団地I-12区）

本工事地点は工学部第一機械工学科と第二機械工学科のほぼ中央西端部の芝が植えられた庭園部分であるが、ここを2m×2mの範囲で地表下約80cmまで掘削することとなった。立合調査の結果、地表下40cmまではしまりのない腐食土が、それ以下には固く締まったシラスが堆積していることが知られた。前者はおそらく庭園造園時の盛り土であろうと考えられる。また、下層のシラスには拳大から人頭大の塊石やビニール



第5図 胸像台座工事立合調査位置図 (1/2000)

袋等が含まれており、これについても二次的な移動を受けた客土と考えられるものであった。

以上のように、本工事においては埋蔵文化財への影響は認められなかった。



写真1. 胸像台座設置工事作業状況



写真2. 胸像台座設置工事完掘状況



## 第Ⅱ部 昭和63年度（昭和63年4月～平成元年1月）鹿児島大学構内遺跡発掘調査報告

- 第1章 昭和63年度（昭和63年4月～平成元年1月）調査の概要
- 第2章 鹿児島大学郡元団地P-4・5区における試掘調査報告
- 第3章 鹿児島大学宇宿団地E-8区における試掘調査報告
- 第4章 昭和63年度（昭和63年4月～平成元年1月）鹿児島大学構内における立合調査報告

# 第1章 昭和63年度（昭和63年4月～平成元年1月）調査の概要

昭和63年4月～平成元年1月においては下記の試掘調査（2件）及び立合調査（4件）を実施した。

## ・試掘調査

教育学部教育実践研究指導センター建設予定地における埋蔵文化財試掘確認調査（昭和63年11月21日～12月5日，郡元団地P-4・5区）

医学部附属病院MRI-CT棟建設予定地における埋蔵文化財試掘確認調査（平成元年1月9日～19日，宇宿団地E-8区）

## ・立合調査

工学部焼却場整備工事（昭和63年5月25日，郡元団地I-13区）

農学部電気幹線整備工事（昭和63年10月11～14・17・21・24日，郡元団地B～E-5～8区）

農学部農学科等消化栓設備改修工事（昭和63年11月1・2・15・16日，郡元団地I-11・12区）

郡元地区自家給水施設改修工事（昭和63年12月1日，郡元団地F-12区）

教育学部教育実践研究指導センター建設予定地における試掘調査においては、成川式土器期の良好な遺物包含層が検出された。小面積の調査ではあったがかなりの点数の遺物が出土しており、何らかの遺構も存在する可能性が高いと考えられる。水町遺跡をはじめとして教育学部構内で調査が行われた諸地点においては、県立医大遺跡や附属中敷地内遺跡のほかには良好な成川式期の包含層が検出されていないことを考えると、鹿児島大学構内遺跡の全体像を考える上において重要な位置を占めるものと考えられる。

医学部附属病院MRI-CT棟建設予定地において実施された試掘調査は、宇宿団地内においては、へい獣焼却炉建設地内発掘調査、及び臨床研究棟建設地内試掘・本調査に続くもので、本キャンパス内における埋蔵文化財遺物包含層の残存状況を把握するための資料を提供することとなった。調査地点は周囲をカットされた独立丘陵状を呈する部分であるが、約1.5mの二次堆積土の下にアカホヤ火山灰層が残存することが確認され、さらにその直下層から縄文時代早期に位置付けられている前平式土器が検出された。本地点は造成時の削平が甚だしく遺物包含層は残存していないものと予想されていた地点であったが、今回の調査はこのような見解を覆すものであり、また宇宿団地の開発にあたっては埋蔵文化財への配慮がより一層必要であることを改めて示したものであった。

上記の立合調査においては、何れも遺物の検出はほとんどみられなかったものの、かなり広範な地域にわたって各地点において土層の観察を行う機会に恵まれることとなった。

## 第2章 鹿児島大学郡元団地P-4・5区における試掘調査

### 1. 調査に至る経過

鹿児島大学では教育学部教育実践研究指導センター及び美術・音楽科棟の建設を計画している。建設地として予定されている地点は、水町遺跡として周知の文化研究棟建設地の東にあたる。また、教育学部構内はこの他にも各地点において鹿児島県教育委員会文化課・鹿児島大学法文学部考古学研究室、及び当埋蔵文化財調査室によって既に数次にわたって調査が行われており、何れの調査においても埋蔵文化財包含層が確認されている。このため埋蔵文化財調査室では本建設予定地において試掘調査を実施し、埋蔵文化財包蔵の有無を確認することとなった。

### 2. 調査体制

本試掘調査は、下記の体制で昭和63年11月21日から12月5日まで行った。

調査主体者 鹿児島大学長 井形昭弘

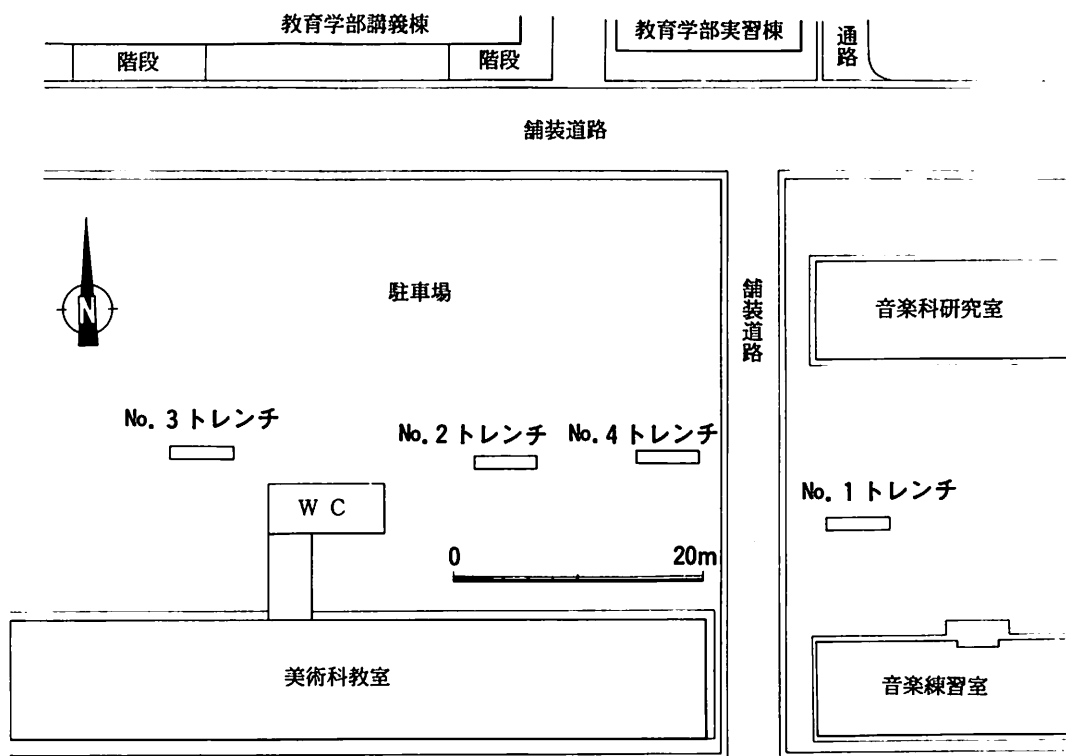
調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長 上村俊雄

室員 松永幸男・金子千穂枝・砂田光紀

発掘調査作業員

岩戸エミ子・狩集エミ子・名越ヒデ子・野下ヨブ子・前田スガ・盛満アイ子・脇タミ子・脇ツルエ・脇俊子



第6図 調査地点位置図 (1/600)

### 3. 調査の経過

今回の試掘調査においては、既述のように美術・音楽科棟と教育実践研究指導センターという東西方向に一直線に並ぶ二つの建物の建設予定地内の埋蔵文化財包蔵の有無を確認することを目的とした。トレンチは、当初、建設予定地の西側はほぼ二分の二が舗装道路として現在利用されている教育実践研究指導センター建設予定地内にこれを避けて一カ所、また、美術・音楽科棟建設予定地内に2カ所設定した。トレンチには東から西に順に番号をつけ、No.1 トレンチ・No.2 トレンチ・No.3 トレンチと呼称している（第6図）。

各トレンチともにほぼ同時に掘削を開始したが、掘削が進むにつれNo.1 トレンチとNo.2 トレンチ・No.3 トレンチとでは堆積層の状況がかなり異なっていることが判明した。このため、両者間の関係を調べるために、No.1 トレンチとNo.2 トレンチとのほぼ中間に新たにトレンチを設定し、No.4 トレンチとした。しかし、本トレンチの状況はNo.2 トレンチのそれとほぼ同様であったため、初期の目的を十分に果たすことはできなかった。

遺物は各トレンチから土器を中心として出土しているが、東寄りのトレンチほど出土量が多かった。遺物各個体は小片が多かったものの、No.1 トレンチにおいてはかなり多量に出土しており、本地点に良好な遺物包含層が存在することを推測させるに充分であった。

今回の試掘調査においては明確に人為的なものと断定できる遺構の検出は少なかったものの、No.2 トレンチにおいて幅80cmほどの溝状遺構が検出されている。また、No.3 トレンチにおいては幅35cmほどの溝状遺構が検出されているほか、第5層とした砂層の上面において黒色土の落ち込みが認められた。No.4 トレンチにおいては、本トレンチで第8層とした土層の上面でほぼ南北方向に延びる幅35cm・深さ12cm程の溝が検出されている。この溝にはその西側にこれとほぼ平行して6個のピットが並んでおり、これらが人為的なものであるならばその性格が目立つところである。

なお、調査中、宮崎大学農学部藤原宏志助教授にプラント・オパール分析を依頼した。分析資料採取はNo.1 トレンチ南壁東半部・No.2 トレンチ西壁・No.3 トレンチ東壁において行われている。

### 4. 調査報告

今回の調査においては幅1m、長さ5mのトレンチを4カ所設定したが、上述のとおり各トレンチの土層堆積の様相はかなり異なっている。このため、ここではとりあえず各トレンチごとに調査結果を報告することとし、その後、次節において本試掘調査のまとめを行う際にあわせて各トレンチ間の土層の対応関係などについて検討を加えたい。

#### (1) No.1 トレンチ

##### a. 土層（第7図）

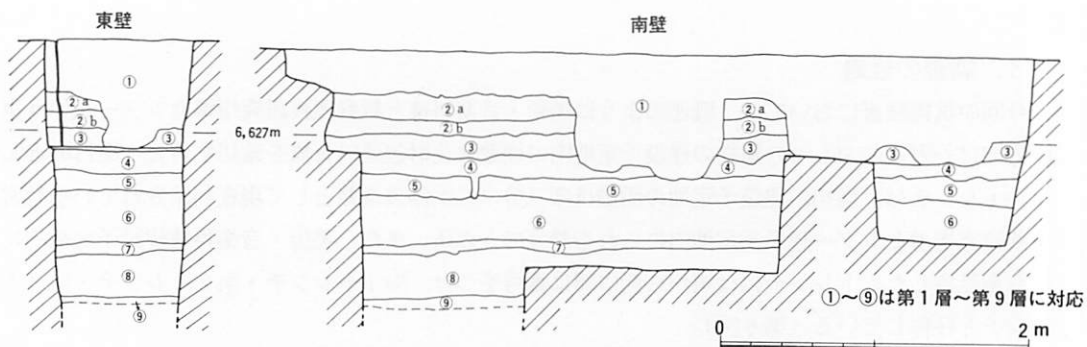
第1層 攪乱坵埋土及び客土

第2a層 灰色砂混じり砂質シルト層（軽石粒をごくわずかではあるが含む）

第2b層 2a層と同質の層であるが、2a層よりも灰色味が若干弱い

第3層 灰褐色砂混じりシルト層（黄色パミス及び軽石粒を含む）

第4層 濁褐色砂混じり砂質シルト（3層よりも砂の含有量が多い）



第7図 No. 1トレンチ土層図 (1/50)

第5層 濁灰褐色砂質シルト層（軽石小粒を若干含む）

第6層 濁灰色粘質土

第7層 黄褐色粘質土（6層よりも粘性が強い）

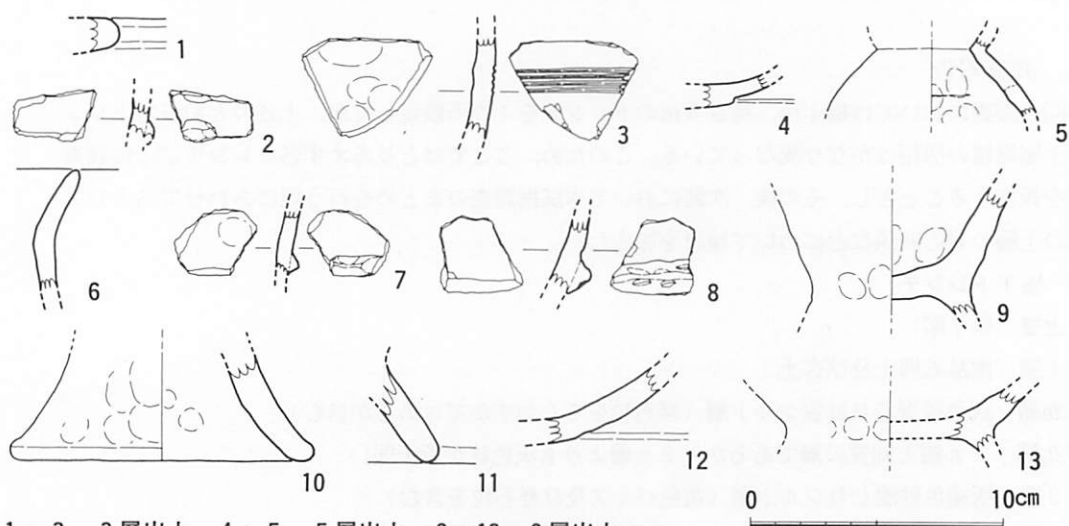
第8層 暗濁褐色粘質土

第9層 暗濁褐色砂層（シルト質土混在）

b. 出土遺物（第8図）

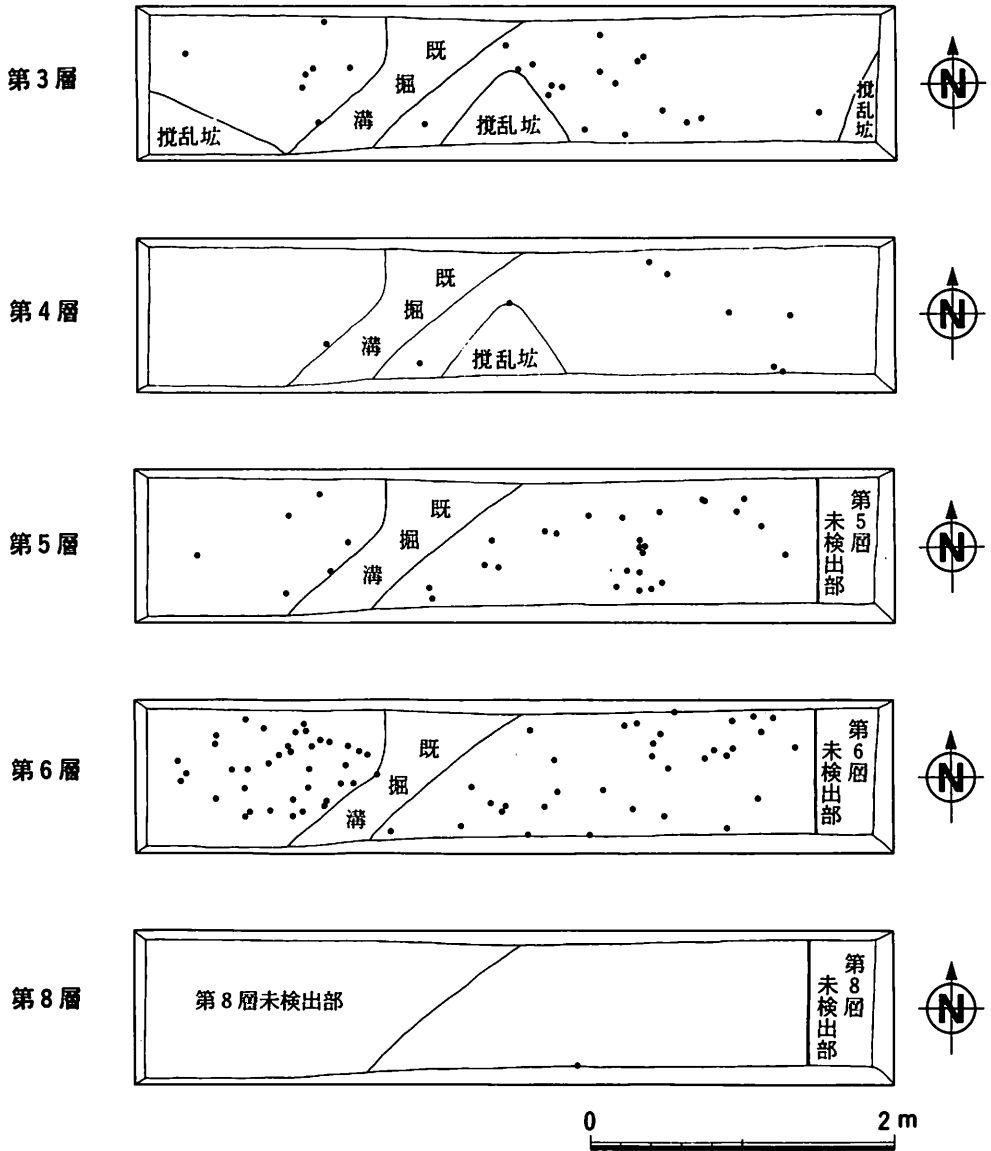
本トレンチはNo.1～4トレンチの中で最も多量に遺物の出土が認められたトレンチである（第9図）。3～6・8層から成川式土器を中心とした土器が出土しているが、3層からは弥生土器の甕口縁部片・成川式土器・土師質土器・須恵質土器が出土しており、本層がプライマリーなものではないことが知られた。また、5・6層からは全て小片ではあるものの、かなり多量の成川式土器片が出土しており、本地点に古墳時代の良好な遺物包含層が存在することを示している。

第8図1～3は第3層出土遺物である。1は弥生時代中期の甕の口縁部片、2は成川式土器の甕の肩部突帯貼付部位の破片と考えられる小片である。3は、色調がかなり白色味が強い灰白色を呈



1～3. 3層出土, 4・5. 5層出土, 6～13. 6層出土

第8図 No. 1トレンチ出土土器 (1/3)



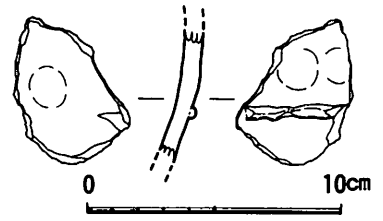
第9図 No.1トレンチ層別出土土器分布図 (1/50)

する須恵質の土器片である。内面にはユビオサエ及びナデの痕が明瞭に残っており、また外面には4本単位の櫛描きの直線文が施されている。4・5は第5層出土の成川式土器である。どちらも小片であるが、5についてははろうじて図上で復元を行うことができた。5の内面にはユビオサエ及び粘土帯接合痕が明瞭に残っている。6～13は成川式土器の単純層と考えられる第6層から出土した土器である。6～11は甕の破片であるが、口縁部形態には屈曲部に綾線を形成せず緩やかに外反

c. 出土遺物 (第11・12図)

4層の直上部及び4層中から、成川式土器が出土している(第11図)。ここでは図化可能であった成川式土器甕1点を図示している。

第12図の土器は、第4層上半部の鉄分が浸透し硬化した部分から出土したもので、おそらく若干内湾すると考えられる甕の口縁部片である。断面「カマボコ」状の突帯が貼付されている。



第12図 No. 2 トレンチ出土土器 (1/3)

(3) No. 3 トレンチ

a. 土層 (第13図)

・西壁

第1層 客土

第2層 濁灰色砂混じり砂質シルト層 (軽石小粒が散見される)

第3層 濁褐色砂混じりシルト層 (第2層よりも砂質が弱く、黄色パミス・軽石小粒を含む)

第4層 黒褐色シルト層 (軽石礫を若干含み、下層の砂層との境は漸移的で不明瞭)

第5層 暗褐色シルト混じり濁灰色砂層

第6層 暗灰色砂層 (鉄分を含み、一部は深い褐色を呈する)

第7層 明灰色砂層 (鉄分をまばらに含み、部分的に深い褐色を呈する)

第8層 明灰色砂層

・南壁

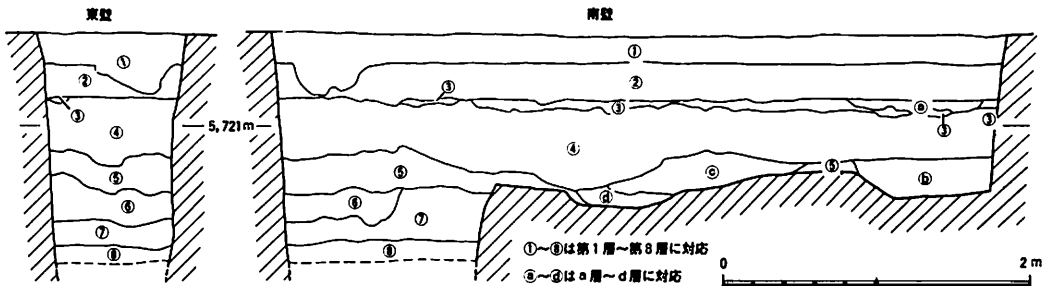
第1層～第8層は西壁に同じ。

a層 濁灰褐色砂混じり砂質シルト層 (パミス及び径5mm前後の軽石小粒を含む)

b層 粗砂混じり黒褐色シルト層 (落ち込みの埋土に相当し、第4層よりも黒色味が強く軽石礫を含む)

c層 淡褐色シルト混じり粗砂層 (軽石礫を含む)

d層 濁暗青褐色粗砂混じりシルト層 (粗砂を多量に含み、軽石礫も含む)



第13図 No. 3 トレンチ土層図 (1/50)

第4層 黒褐色粘質シルト層（上部は厚さ5cm前後の鉄分が浸透した固く締まった部分をなしている。）

第5層 濁褐色砂層（やや粗い砂からなる層で軽石礫が多く、上部には4層土が浸透しており両層間の境は不明瞭である）

第6層 淡褐色砂層（5層に比べ軽石礫の包含がかなり多い）

・北壁（第2・3c・3g・3j・4～6層は西壁に同じ）

a層 攪乱坵埋土

b層 灰白色砂質シルト層（軽石礫を多量に含む）

c層 直方体の石塊を据えた方形掘り込みの埋土

d層 灰色砂混じり砂質シルト層（径0.5～1cmほどの軽石小粒を含む）

e層 淡褐色砂層（軽石小粒を含み、粗砂も多量に含まれる）

f層 淡褐色砂層（粗砂・軽石を含まない点でe層と異なる）

g層 淡灰褐色砂質シルト層（軽石粒を含む）

h層 濁褐色のやや粗い砂からなる層

i層 濁灰褐色砂混じりシルト層（軽石小粒を含む）

j層 灰色シルト層（鉄分の浸透が認められる）

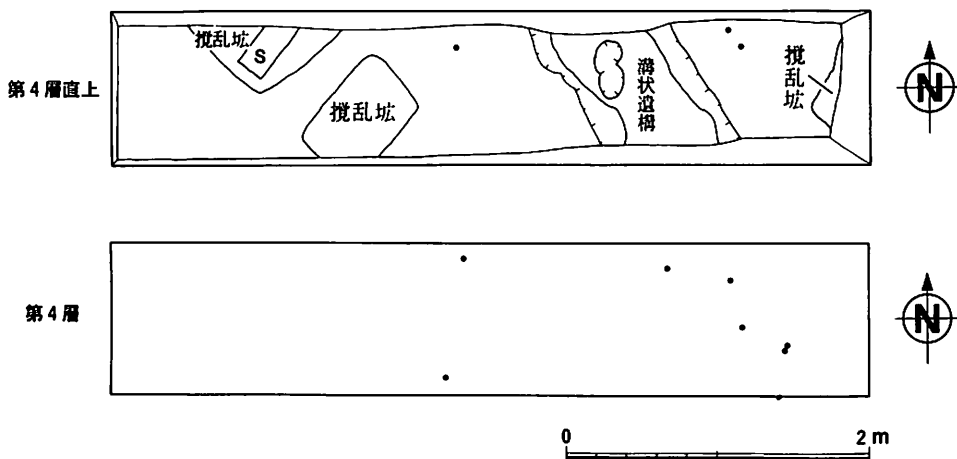
k層 明褐色粗砂層

l層 濁褐色シルト層（粘性を帯びる）

m層 暗灰褐色シルト層（粘性を帯びる）

b. 遺構（第11図）

トレンチ東端から1.3m程のところに幅80cm・深さ20cm程の南北方向の溝が検出されている。4層上面で検出されたもので、埋土からは成川式土器小片が数点出土している。本層の下部は、4層上辺部と同様に鉄分の浸透のためかなり硬質になっている。



第11図 No. 2 トレンチ層位別出土土器分布図 (1/50)



するもの（第8図6）と直行ないし内湾すると考えられるもの（第8図7・8）とがみられる。後者には、肩部突帯として、いわゆる「絡縄突帯」が貼付されている。9～11は甕の底部から脚部にかけての破片であるが、10・11ともにやや長い脚部であるのに対し、9に付された脚はかなり短いようである。9については、13とともに鉢の底部である可能性も考えられる。12は、高坏立ち上がり部分の下部の破片である。内面が平滑に仕上げられているのに対し、外面は丹が塗ってはあるものの器面に若干の凹凸が認められる。13は鉢の底部片で、脚部は短い。

## (2) No.2 トレンチ

### a. 土層（第10図）

#### ・西壁

第1層 客土

第2層 灰白色砂混じりシルト層（軽石小粒含む）

第3a層 若干褐色味を帯びた淡灰白色を呈するシルト混じり砂層（軽石小粒を若干含む）

第3b層 淡褐灰白色細砂層（鉄分の浸透がみられる）

第3c層 淡灰色細砂層（粘質ブロックを含み、鉄分の浸透がみられる）

第3d層 淡褐色砂層

第3e層 やや濁った灰色砂質シルト層（3i層とはほぼ同質で、鉄分の浸透がみられる）

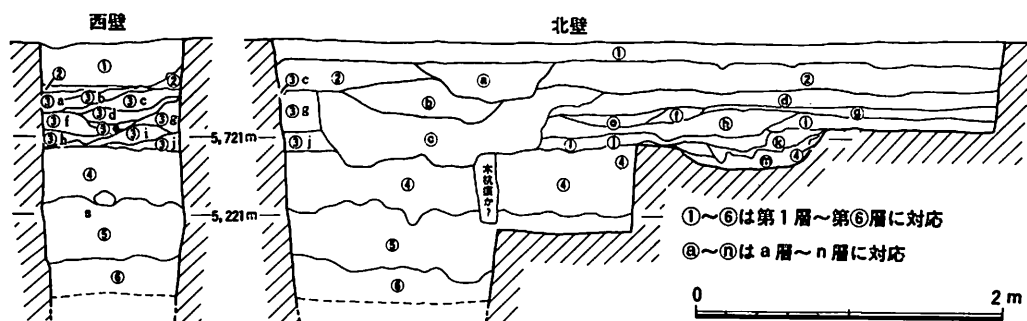
第3f層 淡灰白色砂混じり砂質シルト層（鉄分の浸透がみられる）

第3g層 3e層土と淡褐色粗砂層との互層

第3h層 淡く褐色味を帯びた白色砂層（細砂が若干荒い砂をサンドイッチ状に挟む）

第3i層 3e層土と同質

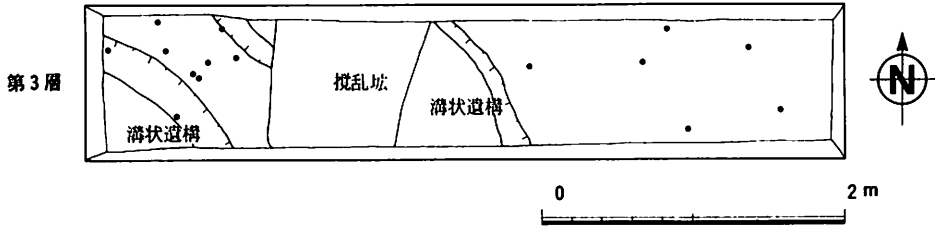
第3j層 淡青灰色砂質シルト層



第10図 No.2 トレンチ土層図 (1/50)

b. 遺構 (第14図)

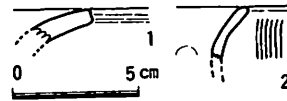
トレンチ西南隅に、一片が北西-南東方向を向く落ち込みがみられた。また、これと方向を同じくする幅1 m程の溝状の落ち込みが、トレンチのほぼ中央部で認められた。これらは砂層の上面からの落ち込みで、底面も明確に検出されたわけではない。



第14図 No. 3 トレンチ第3層出土土器分布図 (1/50)

c. 遺物 (第15図)

第2・3層から、土器小片が少量出土している。第15図1・2はともに3層出土の土器である。1は、それが小片であることや器面が磨耗していること等のために、傾き・器面



第15図 No. 3 トレンチ出土土器 (1/3)

調整などが不明であるが、壺ないし甕の口縁部片と考えられる。成川式土器であろうか。3は緩やかに外反する口縁部片で、器壁が薄く外面には縦方向のハケメが認められる。

(4) No. 4 トレンチ

a. 土層 (第16図)

第1層 客土

第2a層 濁灰色砂混じりシルト層 (パミス含む)

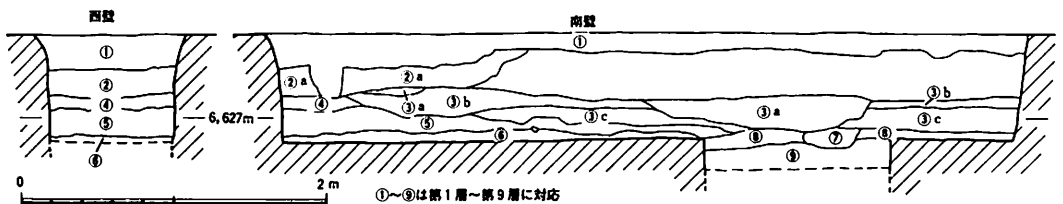
第2b層 灰白色砂混じりシルト層 (パミス含む)

第3a層 灰褐色砂混じりシルト層 (パミス含む)

第3b層 濁黄褐色砂質シルト層 (パミス含む)

第3c層 濁灰褐色砂質シルト層 (パミス含む)

第4層 明褐色粗砂混じりシルト層



第16図 No. 4 トレンチ土層図 (1/50)

第5層 暗紫灰色砂質シルト層（軽石粒が目立ち、鉄分の浸透のために部分的に固くなっている。）

第6層 黄褐色砂層

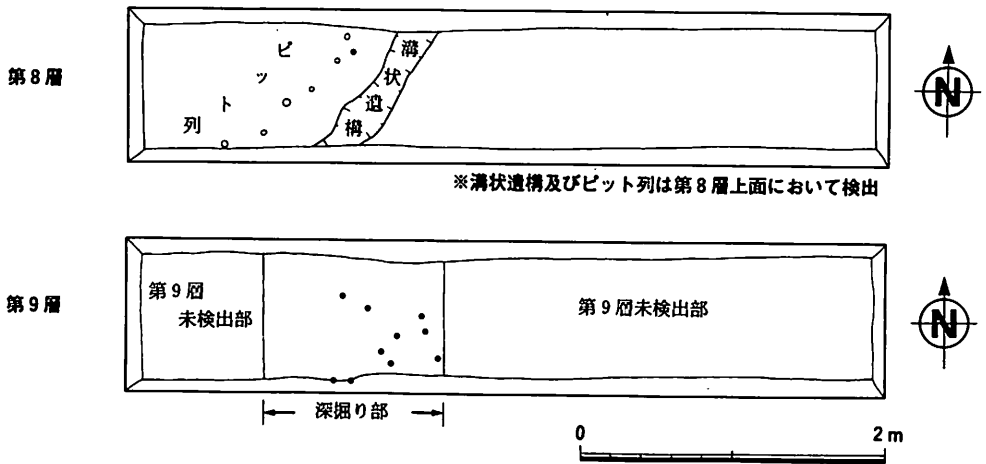
第7層 明黄褐色砂層（やや粗い砂層である）

第8層 濁灰褐色砂質シルトを基調とし部分的に黄褐色土が混在する層

第9層 暗褐色シルト層

b. 遺構（第17図）

トレンチの西側において、幅35cm・深さ12cmほどの北東-南西方向に延びる溝が検出されている。8層上面において検出されたもので、溝中にはやや粒が粗い明黄褐色砂が堆積していた。さらにこの溝の西側には径3cmから6cm程のピットが若干蛇行しながらも溝の走向にはほぼ平行して6個並んでいる。両者の在り方は何らかの有機的な関連を推測させるものであるが、これについては本調査の際に改めて検討したい。これらの遺構の年代については、8層出土遺物が成川式土器小片一片のみであることから、現時点では成川式期以降であるということが指摘できるだけである。



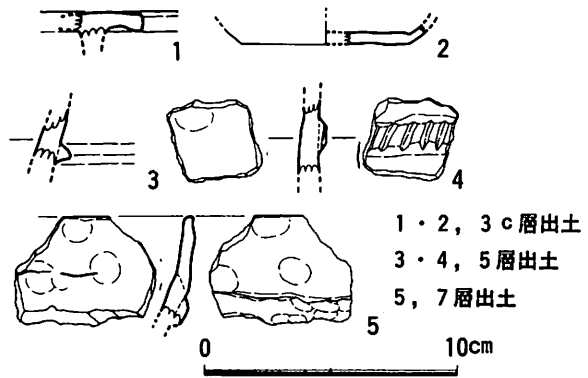
第17図 No. 4 トレンチ層別別出土土器分布図 (1/50)

c. 遺物

第2b・3a・3b・3c・5・8・9層から遺物が出土しているが、5層以上については現代の遺物も混在しており、近年の堆積層と考えられる。また、9層については調査面積がかなり狭かったが、出土土器の多さ（第18図）から本層が成川式期の良好な遺物包含層であることが容易に推測される。

1・2は、3c層出土の弥生土器片と陶磁器片である。1は口縁部が内外両方向へ拡張されている甕で、弥生時代中期に比定されよう。器面は若干磨耗している。2は内外両面および底面に淡灰白色の釉がかかった陶磁器片で、器壁はかなり薄い。底面中央部は、ごくわずかではあるが窪んでいる。磁胎も淡灰白色を呈するが、釉の色調よりも若干濁っている。3・4は5層出土の成川式土器甕の小片で、3は肩部には断面三角形突帯が、また4には断面低台形状の突帯が貼付されてい

る。また、後者には左下がりの刻み目がほぼ等間隔で付されている。5は、9層出土の成川式土器甕の口縁部片である。若干内湾ぎみに立ち上がる口縁部で、肩部にはいわゆる「絡縄突帯」が貼付されている。



第18図 No. 4 トレンチ出土土器 (1/3)

## 5. まとめ

今回の調査においては現在の美術科教室・音楽科練習室の北側一帯を調査対象地とし、4カ所に試掘調査のためのトレンチを設定した。既述のごとく東西に並ぶ各トレンチにおいて堆積層の様相がかなり異なり、土層の対応関係を把握し難かった。わ

ずかにNo. 2 トレンチの第4層がNo. 4 トレンチの第9層に、またNo. 2 トレンチの第5層以下の砂層がNo. 3 トレンチの第5層以下の砂層にはほぼ対応することが確認されたのみである。比較的狭い範囲におけるこのような土層の在り方は、本地点における堆積層の様相がかなり複雑なものであることを予想させるに充分である。

検出された遺構内は溝・ピット及び性格不明の落ち込みのみであったが、No. 4 トレンチで検出された溝にはこれに平行して並ぶピット群も検出され、その性格が注目されるところである。これらの遺構には遺物は伴っていないが、何れも成川式土器包含層より上方に存在することから考えて、おそらく成川式期以後の所産と考えられる。

出土遺物としては弥生土器・成川式土器、及び中近世の陶磁器片が出土している。これらは全て小片で、接合する個体もほとんどみられなかった。しかし、No. 1 トレンチ第5・6層・No. 2 トレンチ第4層・No. 3 トレンチ第3層・No. 4 トレンチ第9層はほぼ成川式土器の単純層と考えられるもので、本地点にかなり広範囲に古墳時代の遺物包含層が広がっていることを示している。No. 2 トレンチ第4層及びNo. 3 トレンチ第3層においては遺物の出土量が少なかったものの、No. 1 トレンチ第5・6層とNo. 4 トレンチ第9層からはかなりまとまった量の出土がみられ、現在の美術科教室東半部から音楽練習室が位置する地点を中心に該期の諸遺構が存在する可能性が高いと考えられる。

## 第3章 鹿児島大学宇宿団地E－8区における試掘調査報告

### 1. 調査に至る経過

鹿児島大学では、医学部附属病院にMRI－CT棟の建設を計画している。建設予定地は現在学生駐車場として利用されている部分で宇宿団地の北西部に位置し、現地形は周縁部及び上部をカットされた独立丘陵状を呈している。

宇宿団地においてはその造成工事の際に多量の遺物が採集されたことが知られているが、その概要については本田道輝氏が『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅰ』に報告を行っている。さらに鹿児島大学埋蔵文化財調査室が、本キャンパス内でへい獣焼却炉や臨床研究棟の建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査を実施している。これらの調査の際には弥生時代・古墳時代の諸遺構が検出されたのをはじめ、アカホヤ火山灰層下に縄文時代早期の遺物包含層が残存することが明らかにされている。この調査結果は本キャンパスにおいては造成工事の際に埋蔵文化財包含層の大部分が削平されたという見解を覆したばかりでなく、宇宿団地に南九州では未だ類例の少ない弥生時代中期の集落址が存在することを明らかにした。

今回の建設予定地は前述のように上部をかなり削平されているとみられることや、本地点の南西に隣接する医学部附属病院中央診療棟の建設地においては既にシラス層まで削平されていたこと等の点から考えて、当初埋蔵文化財包含層が残っている可能性きわめて小さいと思われた。しかし、今回の試掘確認調査によって、現地表下1.5mほどまでは既に二次的な攪乱を受けていたものの、アカホヤ火山灰下部以下についてはプライマリーな状態で残存していることが確認され、さらに本地点における縄文時代早期遺物包含層の存在が明らかになった。

### 2. 調査体制

本試掘調査は、下記の体制で平成元年1月9日～19日まで行った。

調査主体者 鹿児島大学長 井形昭弘

調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長 上村俊雄

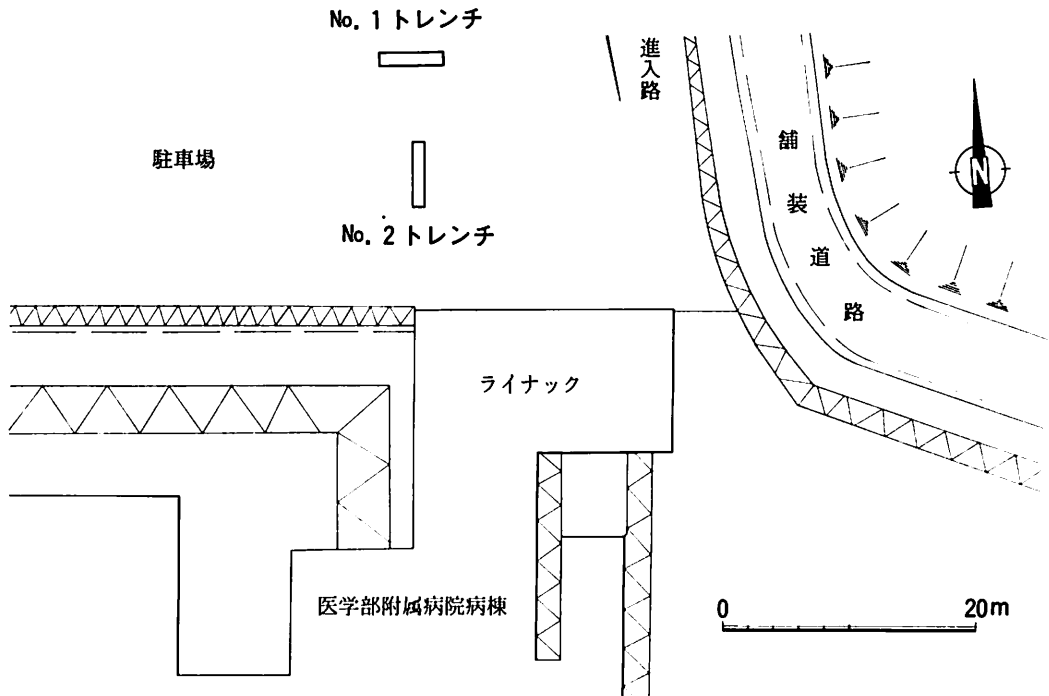
室員 松永幸男・金子千穂枝・砂田光紀

発掘調査作業員

岩戸エミ子・狩集エミ子・名越ヒデ子・前田スガ・盛満アイ子・脇俊子

### 3. 調査の経過

医学部附属病院MRI－CT棟は、附属病院の北東部に突き出たライナックの北側に接続する460㎡を建設予定地としている。本地点は現在駐車場として利用されており、また、駐車場への進入路にもあたるため、試掘トレンチの設定にあたってはこれらの事情を配慮する必要があった。このた



第19図 調査地点位置図 (1/600)

め、試掘トレンチを建設予定地の西縁部に2箇所、「T」字形に設定することとなった。(第19図)。東西方向のトレンチをNo.1 トレンチ、南北方向のトレンチをNo.2 トレンチと呼称している。

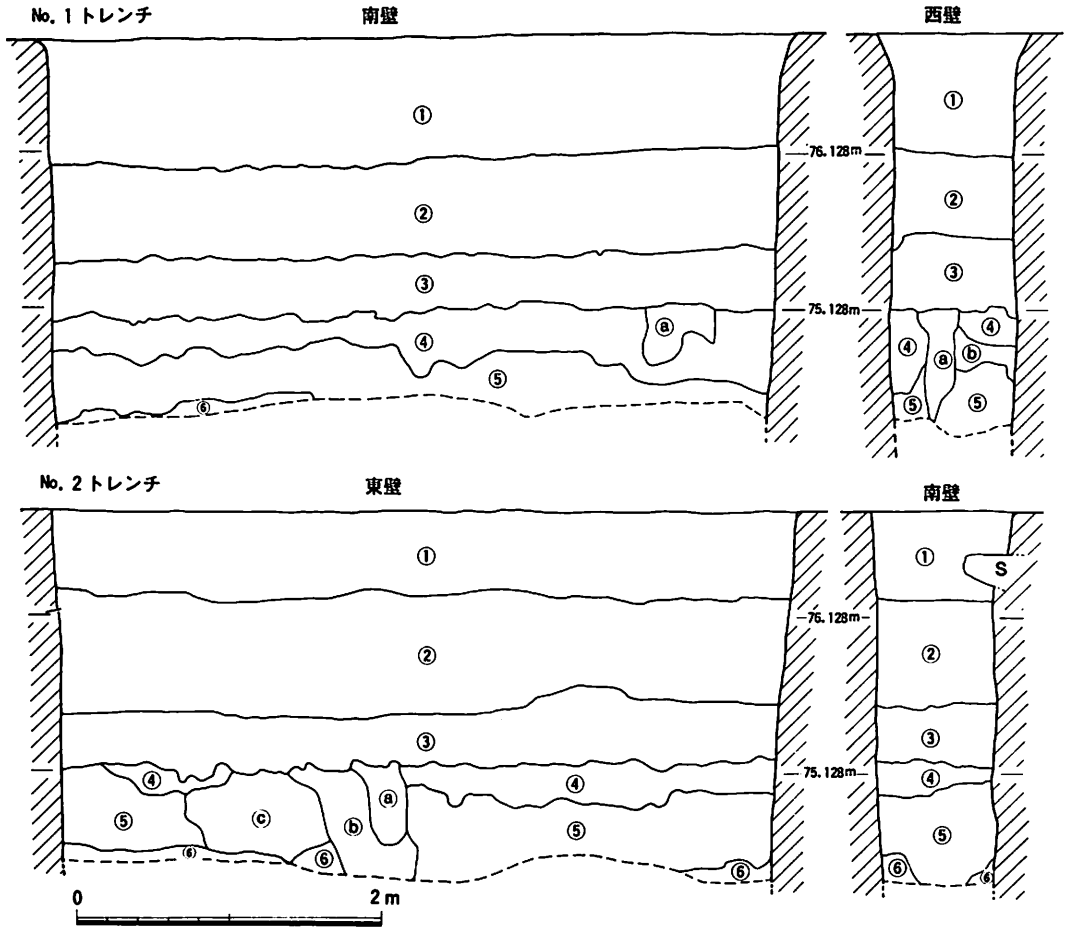
調査にあたっては、まず、バラスを敷きつめて特に固く整地がなされていた表層部を地表下70cmほどの部分までパワーシャベルによって除去し、その後、人力による攪乱部の掘り下げを行った。この結果、現地地表下約1.5mのアカホヤ火山灰層中まで造成工事の際の攪乱が及んでいることが判明したが、幸いにもアカホヤ火山灰層下の縄文時代早期遺物包含層は遺存していることが確認された。残念ながら遺構の検出はみられなかったものの、前平式土器のややまとまった破片が出土している。また、トレンチ壁面の観察によって、いわゆる「局部断層」の存在も確認されている。

#### 4. 層序 (第20図)

No.1 トレンチ・No.2 トレンチともに同様な土層の堆積状況であった。以下の基本土層が認められた。

第1層 客土 (駐車場整備のために敷かれたバラスや礫を多量に含み固く整地されている。)

第2層 造成時に転圧を受けた層 (軽石小粒混じりの暗褐色シルトからなる。10cm程度の盛土ごとに転圧を加えたような状況が見られる。層中には鉄片・プラスチック製玩具、及び多量の藁等が含まれている。弥生時代中期土器甕口縁部片が一点出土している。)



第20図 No. 1・2トレンチ土層図 (1/50)

第3層 造成時に転圧を受けた層（濁褐色を呈する。アカホヤ火山灰層を二次的に移動させ盛ったものか。）

※ 第2層・第3層は堆積の契機は同一であると考えられるが、色調等から便宜的・機械的に分層したものである。

第4層 アカホヤ火山灰層相当層（色調に濁りがみられる。）

第5層 暗灰褐色粗砂混じりシルト質土層（固く締まった層で、「薩摩」火山灰層中に含まれる黄色軽石を若干含む。縄文時代早期遺物包含層であり、前平式土器が出土している。）

第6層 いわゆる「薩摩」火山灰層

なお、No. 2トレンチ東壁においては、局部断層かと思われる土層の部分的なズレが認められる。第20図No. 2トレンチ東壁土層図中のa層・b層・c層がこれにあたる。a層・b層・c層の土

質は以下のものである。

- a層 濁褐色粗砂混じりシルト層（フカフカの締まりがない層で、アカホヤ火山灰層に相当するものと考えられる。）
- b層 濁灰褐色粗砂混じりシルト層（固く締まり「薩摩」火山灰層に含まれる黄色軽石を若干包合する。色調はやや異なるものの、土質などから考えて第5層に対応する層であろう。）
- c層 濁明褐色粗砂層（比較的固く締まっている層で黄色軽石を多量に含む。第6層対応層と考えられる。）

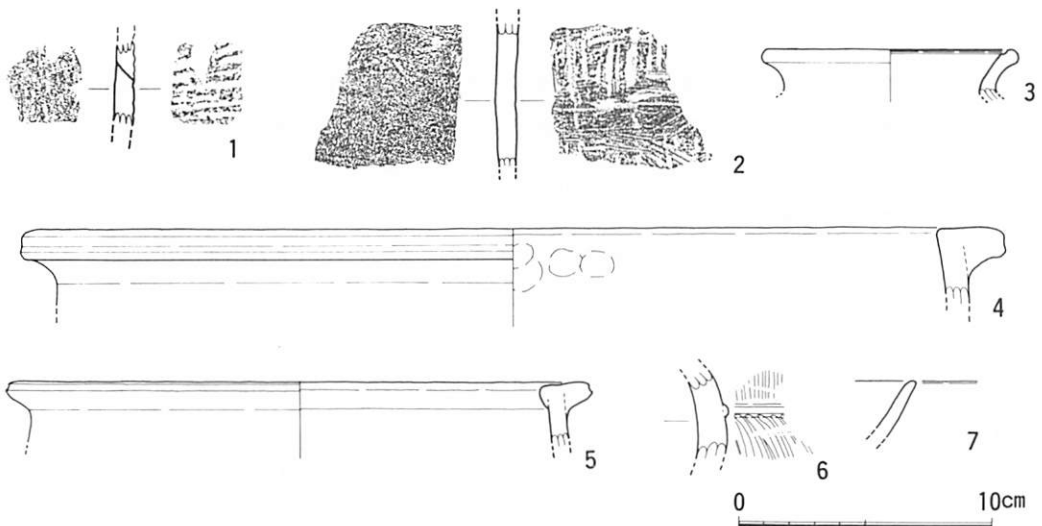
また、No.1 トレンチ西壁土層図中のa層・b層の土質は以下のものである。

- a層 濁灰色砂混じりシルト層（土質はフカフカで全体的に締まりがないが、硬質な部分も存在する。「薩摩」火山灰層中に含まれる黄色軽石粒を若干含む。）
- b層 第4層の土質がより硬質になり、「薩摩」火山灰層中に含まれる黄色軽石粒を多量に含む層

### 5. 遺物（第21・22図）

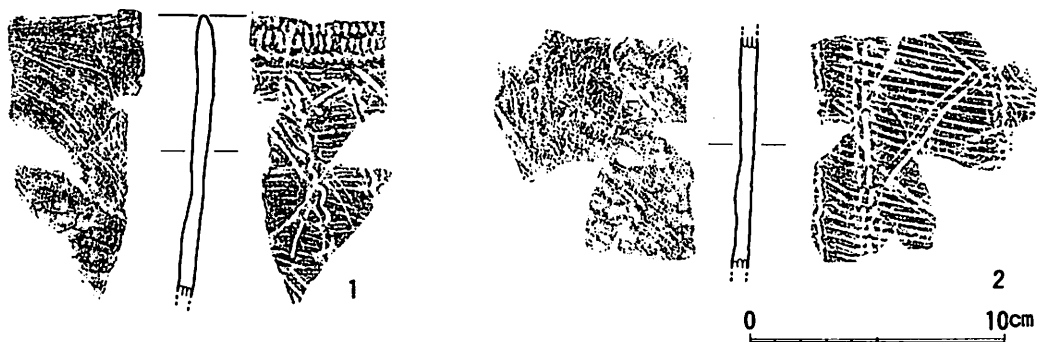
アカホヤ火山灰層下の基本土層第5層中から、縄文時代早期の前平式土器が出土している。このほか、基本土層第2・3層とした攪乱層中からは、縄文時代晩期鉢口縁部片・弥生時代中期甕口縁部片・弥生時代後期壺胴部片・成川式土器高坏口縁部片・中近世陶磁器片が出土しており、断続的な利用ではあったかもしれないが、本遺跡が本来非常に長期にわたって営まれたものであることを示している。

第21図は、第2・3層から出土した土器である。1は外面に横位の貝殻条痕がみられる小破片で、おそらく前平式土器であろう。焼成後穿孔のものと考えられる補修孔が穿たれている。2は二



第21図 第2・3層出土土器 (1/3)





第22図 第5層出土土器 (1/3)

枚貝腹縁を利用したと考えられる施文原体によって、多重の方形ないし方形渦文を描いたと思われる土器で、器面には不明原体による擦過痕がよく残っている。阿高式系土器であろうか。3は縄文時代晩期に属すると考えられる鉢の口縁部片である。内外両面共に丁寧なケンマが施されており、内面口縁端直下には沈線が一条巡っている。4・5は、逆「L」字形を呈する弥生時代中期の甕口縁部片である。5は外面に黒斑がみられる。また、口縁部が若干波状に歪んでいる。6は胴部の小破片であるが、破片中央部に横位の突帯が貼付されており、その上下両方にハケメが明瞭に認められる。これらの特徴及び器形から、おそらく弥生時代後期に位置付けられるのではないかと考えられる。7は成川式土器の高坯口縁部片で、内外面には丹が塗られている。

第22図1・2はアカホヤ火山灰下の第5層から出土したもので、ともに縄文時代早期に位置付けられている前平式土器である。1はおそらく角筒形を、2は円筒形を呈すると考えられる土器である。両者ともに、外面には二枚貝腹縁による横位の条痕の上から、二枚貝腹縁刺突やおそらく二枚貝腹縁を利用したと考えられる原体による二平行線・連続刺突などによって幾何学的な文様が施されている。

## 6. まとめ

医学部附属病院MRI-CT棟建設予定地は宇宿団地の造成工事の際に行われた表面採集によって縄文時代早期の土器片が多数採集された地点で、その結果、該期の遺跡が存在していたことが確実であると考えられた地点である。しかし、現地形から判断して、造成の際の削平がはなはだしく、果たして遺物包含層が残存しているかどうか非常に危惧されていた。今回の試掘調査においては幅1m・長さ5mのトレンチを2カ所に設定したのみであったが、アカホヤ火山灰層下部以下がプライマリーな状態で残存していることを確認し、アカホヤ火山灰層の下の層から縄文時代早期の土器である前平式土器を検出することができた。また、攪乱層中からの出土ではあるが、縄文時代～古墳時代・中近世の遺物も出土しており、本遺跡の形成時期についても認識を新たにさせる資料が得られた。

## 第4章 昭和63年度（昭和63年4月～平成元年1月）鹿児島大学構内における立合調査

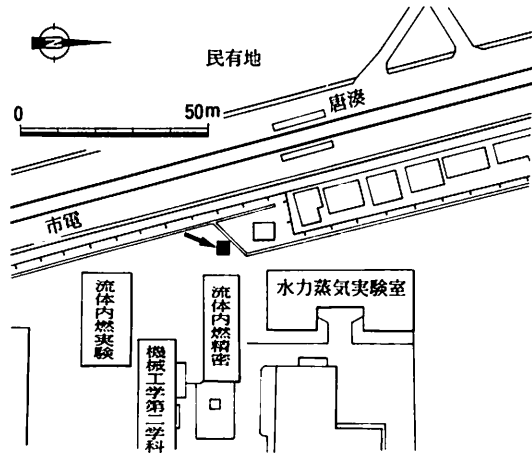
昭和63年度（昭和63年4月1日～平成元年1月31日）においては、以下の工事に伴って立合調査を実施した。

- ・工学部焼却場整備（昭和63年5月25日，郡元団地I-13区）
- ・農学部電気幹線整備工事（昭和63年10月11～14・17・21・24日，郡元団地B～F-5～8区）
- ・農学部農学科消化栓設備改修工事（昭和63年11月1・2・15・16日，郡元団地I・J-11・12区）
- ・郡元地区自家給水施設改修工事（昭和63年12月1日，郡元団地F-12区）

以下，順に報告を行う。

### 工学部焼却場整備に伴う立合調査

工学部では流体内燃精密実験棟の西5.5mに位置する塵捨て場に廃棄物が充満したためこれを重機によって除去することとなったが，この際にあわせて地表下2.5mまでの深掘りを行うことが計画された。このため埋蔵文化財調査室では，当該地点の土層観察も含めて立合調査を実施した。



第23図 工学部焼却場整備工事立合調査地点位置図（1/2000）

焼却場の掘削は既に古墳時代遺物包含層下の黒色の泥炭層及び砂層に

まで達しており，あわせて行われた深掘り部分においても遺物の出土はなかった。

立合調査において行った深掘り部南壁の土層観察結果は以下のようである。

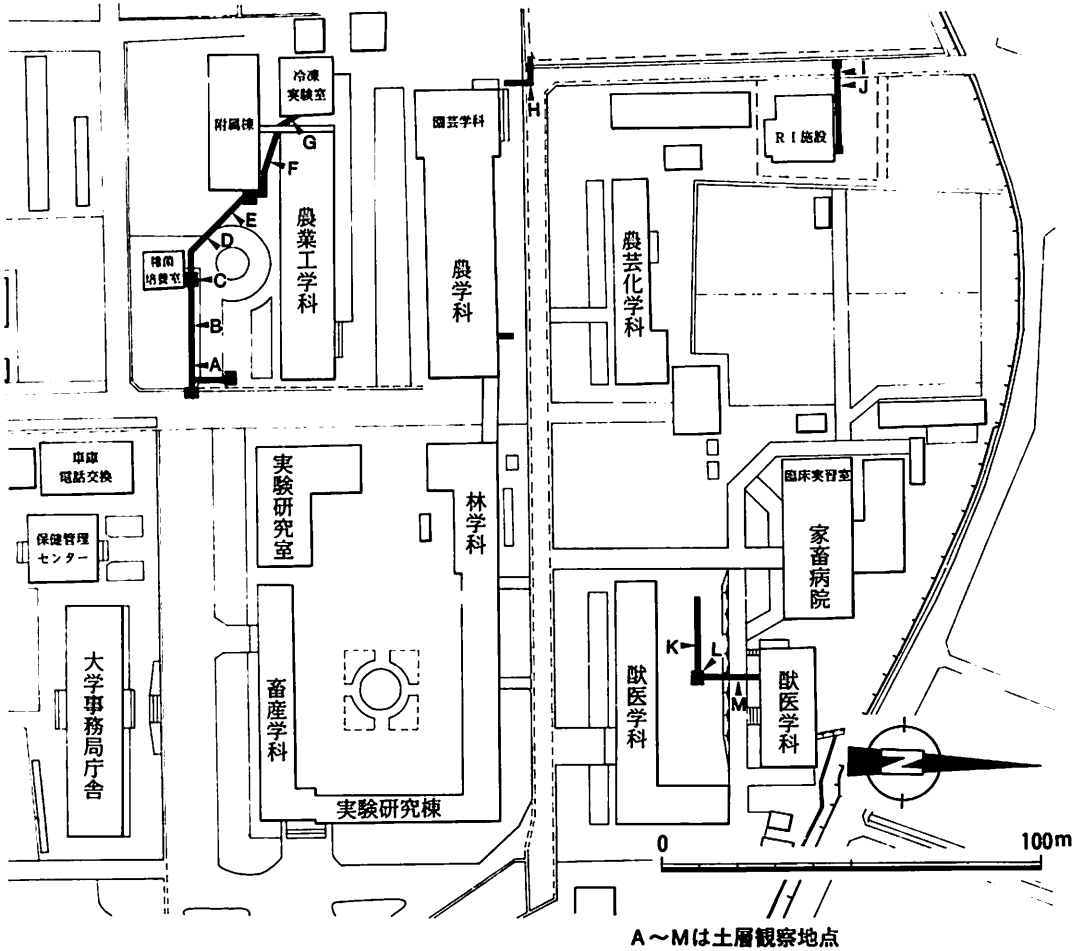
- |  |        |
|--|--------|
| ① 表土（客土）                                   | 層厚55cm |
| ② やや淡い濁灰褐色砂混じりシルト層（鉄分を含む）                  | 層厚10cm |
| ③ 濁灰褐色砂混じりシルト層                             | 層厚16cm |
| ④ 濁灰褐色砂混じりシルトを基調とするが，鉄分の浸透が著しく全体に明褐色味を帯びる層 | 層厚12cm |
| ⑤ 灰色砂混じりシルト層（鉄分の浸透が若干見られる）                 | 層厚12cm |
| ⑥ 灰白色砂混じりシルト層（若干粘性を帯びている）                  | 層厚30cm |
| ⑦ 淡濁灰色砂混じりシルト層（若干粘性を帯びている）                 | 層厚11cm |
| ⑧ 淡灰白色砂層（⑦と同様に径2～3cmの軽石を含む）                | 層厚15cm |

- ⑨ 暗褐色粘質土層 層厚30cm
- ⑩ 砂層 層厚33cm
- ⑪ 黄白色粘土層 層厚 2 cm
- ⑫ 濁灰褐色粘土層 層厚 6 cm
- ⑬ 暗黄褐色粘質土層（植物繊維を多量に含む）

これらのうち⑬は土質をはじめとする諸特徴が、電子計算機室増築地内の調査において基本土層15層としたものに類似する。この対応関係が妥当なものであるならば、⑪・⑫はそれぞれ電子計算機室増築地の基本土層12・13層に対応することになる。

### 農学部電気幹線整備工事に伴う立合調査

この工事に伴い農学部構内の各地点において掘削が行われることとなったが、掘削にあたっては



第24図 農学部電気幹線整備工事立合調査地点位置図 (1/2000)

可能なかぎり既掘部分が利用されることとなった。そこで、これに伴い埋蔵文化財調査室では新たな掘削が行われる部分を中心に立合調査を行った。立合調査は農業工学科研究棟南側・農学科研究棟・園芸学科研究棟北西側・R I 施設・獣医学科中庭において実施したが、このうち農学科研究棟北側の工事箇所は既掘部分であり埋蔵文化財への影響はなかった。これらの調査の際に第24図中のA～Mの地点において土層の観察を行っている。

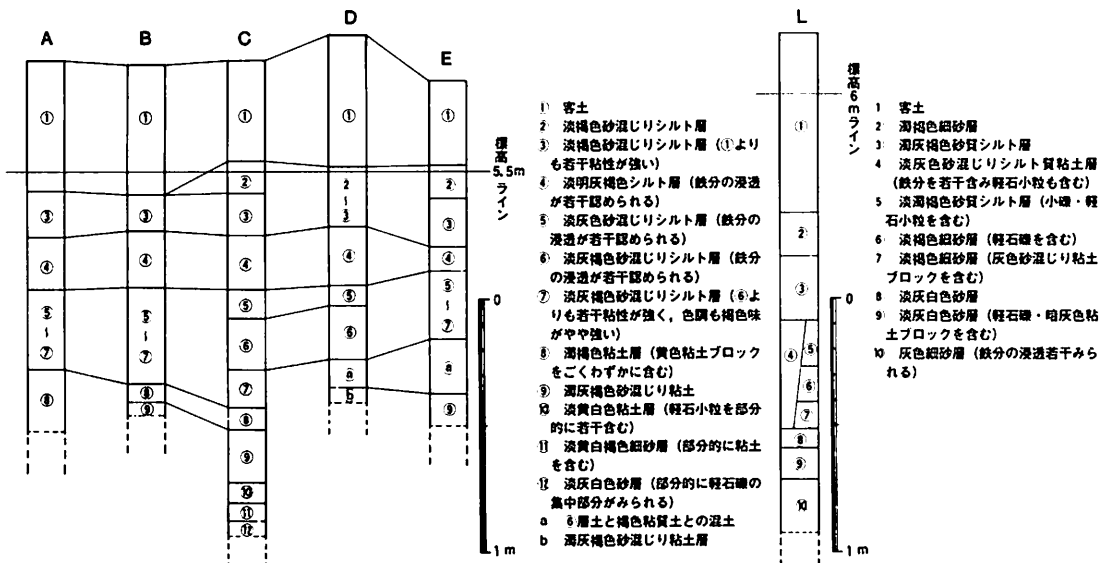
農業工学科研究棟南側においてはA～Gの地点において土層の観察を行ったが、このうちA～Eについては第25図に土層柱状図を示している。なお、地表下0.8mほどまで掘削が行われたF・Gにおいても第25図の①～⑤の堆積が認められている。本地点においては、近世以降の所産と考えられる陶磁器片が工事中に出土している。

園芸学科研究棟北西側における工事地点においてはプライマリーな部分はほとんど残存していなかったが、かろうじてHにおいて以下のような土層の観察を行うことができた。

- |                           |         |
|---------------------------|---------|
| ① 客土                      | 層厚約40cm |
| ② 淡濁褐色砂混じり砂質シルト層（軽石小粒を含む） | 層厚約14cm |
| ③ 淡灰褐色砂混じり砂質シルト層（軽石小粒を含む） | 層厚約16cm |
| ④ 黄褐色砂質シルト層（軽石小粒を含む）      | 層厚約8cm  |
| ⑤ 濁灰褐色砂質シルト層（軽石小粒を含む）     |         |

本地点においては、前述のように既掘部分がほとんどを占めていたため、遺物の出土は見られなかった。

R I 施設北側においては、東西方向に約15mほどの掘削が行われた。R I 施設建物の北縁に接して掘削された部分は施設建設に伴う既掘部分であったが、掘削部西端部においてはプライマリーな



※ A～E・Mは第24図の土層観察地点に対応

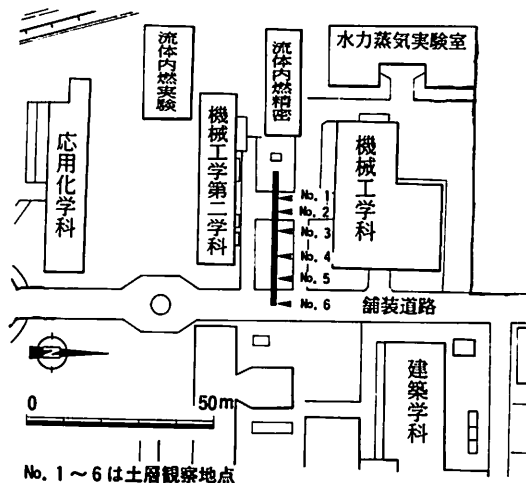
第25図 農学部電気幹線整備工事に伴う立合調査時観察土層

土層が観察された。第24図のI・Jにおいて観察を行ったが、Iにおいては以下のような土層が観察された。

- ① 客土（層厚約50cm）
- ② 濁灰褐色砂質シルト層（層厚約20cm）
- ③ 灰色を基調とするものの淡黄色及び暗灰色の小ブロックが混在する砂混じり砂質シルト層（層厚約20cm）
- ④ 淡濁灰色砂混じり砂質シルト層（地表下140cmまで掘削）

また、Jにおいては、80cmほどの盛り土の下にIの③層が認められた。本工事地点においては、④層から陶器片が一片出土している。

獣医学科中庭では東西方向に15m・南北方向に10mほどの掘削が行われた。土層の観察は第24図のK～Mにおいて実施した。このうちマンホール掘削部分にあたるLにおける土層観察結果を第25図に示している。本地点から出土した遺物は、全て現代のものと思われる陶器片であった。

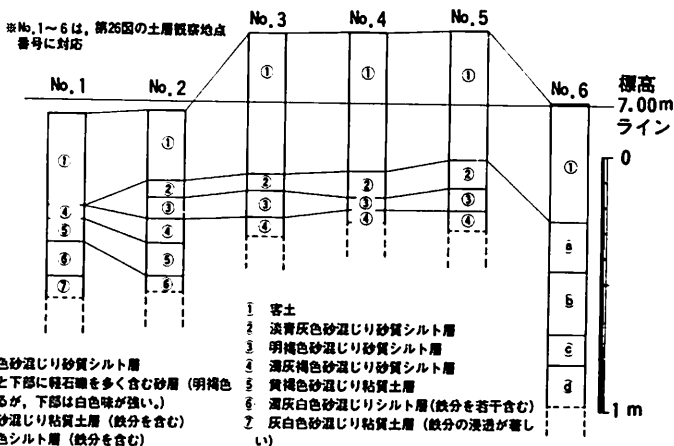


第26図 農学部農学科等消火栓設備改修工事立合調査位置図 (1/2000)

農学部農学科等消火栓設備改修工事に伴う立合調査

工事が行われた地点は工学部第一機械工学科と第二機械工学科とのほぼ中央にあたり、東西方向に約30mにわたって幅50cm・深さ80cmの掘削が行われた。調査中に遺物の出土はなかったものの、掘削部東端部に幅6.1mにわたって河川痕の西半部が検出された。

本地点においても、第26図に示す6カ所で土層の観察を行った。観察結果を第27図に示している。

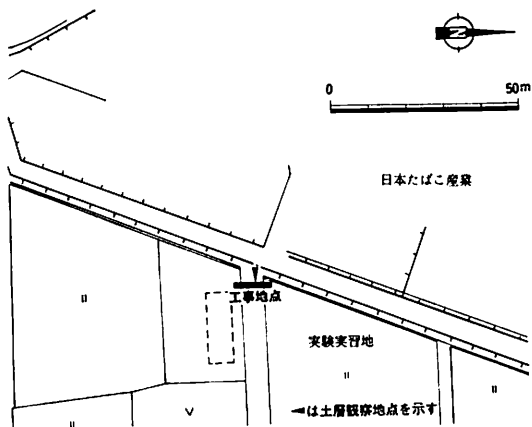


第27図 農学部農学科等消火栓設備改修工事に伴う立合調査時観察土層柱状図

郡元地区自家給水施設改修工事に伴う立合調査

工事によって地表1.2～3mの掘削が行われた。工事対象部分のほとんどの部分が既掘部にあ

たっていたが、通用門の東側の部分においては未掘部分が存在することが確認された。この部分において実施した土層観察結果は以下のようなものである。なお、遺物の出土はみられなかった。



第28図 郡元地区自家給水施設改修工事立合調査位置図 (1/2000)

- ① 客土 (層厚約40cm)
- ② 濁灰色砂混じり砂質シルト層 (層厚約30cm)
- ③ ②層土と④層土との混土層 (層厚約15cm)
- ④ 粗砂ブロックを含む黄褐色砂混じり粘質土 (層厚約30cm)
- ⑤ 濁灰褐色シルト層 (地表下1.3mほどの部分まで掘削)

## 鹿児島大学構内遺跡調査要項

### ・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則

#### (設 置)

第1条 本学に、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会（以下「委員会」という。）を置く。

#### (審 議)

第2条 委員会は、本学の施設計画を円滑に行うため埋蔵文化財に関する次の事項を審議する。

- (1) 基本計画の策定に関すること。
- (2) 調査結果に基づく対策に関すること。

#### (組 織)

第3条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 学長
- (2) 各学部長、教養部長、附属図書館長、医学部附属病院長及び歯学部附属病院長
- (3) 事務局長
- (4) 学生部長

#### (委 員 長)

第4条 委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

#### (議 事)

第5条 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は出席委員の3分の2以上をもって決する。

#### (委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

#### (調査委員会)

第7条 委員会は、本学の埋蔵文化財の調査を行うため、埋蔵文化財調査委員会（以下「調査委員会」という。）を置く。

第8条 調査委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 調査実施計画に関すること。
- (2) 第13条に規定する調査室の室長等の選任に関すること。
- (3) 第13条に規定する調査室の予算に関すること。
- (4) その他埋蔵文化財及び第13条に規定する調査室の業務に関すること。

第9条 調査委員会は、次に掲げる委員をもって組織し、学長が任命する。

- (1) 各学部及び教養部の教授、助教授、講師の中から選任された者各1名
- (2) 第15条2項に規定する調査室長

2 前項第1号の委員の任期は2年とし、委員に欠員を生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第10条 調査委員会に委員長を置き、前条第1項第1号の委員の中から互選により選出する。

2 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

第11条 調査委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決する。

第12条 調査委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(調査室)

第13条 調査委員会に、本学の埋蔵文化財の調査に関する業務を行うための埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

第14条 調査室は、次の業務を行う。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査及び確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) その他必要な事項

第15条 調査室に、室長、主任及びその他の必要な職員を置く。

2 室長は、本学の考古学に関する教官の中から委員会が推薦し、学長が任命する。

3 室長は、調査委員会の定める方針に基づき調査室の業務を掌理する。

4 室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

5 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を調査委員会が推薦し、学長が任命する。

6 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。

7 職員は、調査室の業務に従事する。

(その他)

第16条 埋蔵文化財に関する事務は、事務局施設部において行う。

## 附 則

1 この規則は、昭和60年4月18日から施行する。

2 この規則の施行後最初に任命される委員及び室長の任期は、第9条第2項及び第15条第4項の規定にかかわらず、昭和62年3月31日までとする。

3 鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則（昭和51年1月22日制定）は、廃止する。

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会委員（昭和63年4月1日現在）

委員長 井形 昭弘（鹿児島大学学長）

委員 五味 克夫（法文学部長）

田代 一男（教育学部長）

早坂 祥三（理学部長）

松本 啓（医学部長）



仙波 輝彦 (歯学部長)	立川 正夫 (工学部長)
小倉 弘司 (農学部長)	岩切 成郎 (水産学部長)
荒川 譲 (教養部長)	伊藤 三郎 (連合農学研究科長)
朝倉 哲彦 (医学部附属病院長)	税所 俊郎 (附属図書館長)
河野 岩造 (学生部長)	野井倉武憲 (歯学部附属病院長)
明野 清和 (事務局長)	

・鹿兒島大学埋蔵文化財調査委員会委員 (昭和63年 4 月 1 日現在)

委員長 難波 直彦 (農学部教授)	
委員 原口 泉 (法文学部助教授)	安藤 保 (教育学部教授)
市川 敏裕 (理学部助教授)	秋山 伸一 (医学部教授)
小片 丘彦 (歯学部教授)	松村 博久 (工学部教授)
田中 淑人 (水産学部助教授)	新田 栄治 (教養部助教授)
上村 俊雄 (調査室長併任 法文学部教授)	

・鹿兒島大学埋蔵文化財調査室 (昭和63年 4 月 1 日現在)

室長 (併) 法文学部教授	上村 俊雄
主任 (併) 法文学部助手	松永 幸男
技術補佐員	砂田 光紀 (昭和63年 6 月 8 日～)
技術補佐員	金子千穂枝

## 受贈図書目録(1988年2月1日～1989年1月31日)

書名	発行機関	
<b>単行本</b>		
市川の縄文土器Ⅱ	市立市川考古博物館	1988年
小さな展覧会	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1988年
アジア稲の起源と稲作圏の構造	別府大学付属博物館	1988年
化粧具の歴史 鏡を中心にして	大分市歴史資料館	1988年
菊水町歴史民俗資料館 収蔵目録	菊水町歴史資料館	1988年
城南町歴史民俗資料館収蔵品目録第 2集 小林コレクションⅡ	城南町歴史民俗資料館	1987年
鹿児島市文化財の手引 その5 古い町名をたずねて No.2	鹿児島市教育委員会	1988年
<b>定期刊行物・雑誌</b>		
年報 7 昭和62年度	(財)茨城県教育財団	1988年
歴史人類 第16号	筑波大学歴史・人類学系	1988年
昭和61年度市立市川考古博物館年報	市立市川考古博物館	1988年
君津郡市文化財センター年報 No.5 —昭和61年度—	(財)君津郡市文化財センター	1987年
立正大学考古学研究室彙報 第24号	立正大学文学部考古学研究室	1988年

神奈川県立埋蔵文化財センター年報 7 昭和62年度	神奈川県立埋蔵文化財センター	1988年
富山県埋蔵文化財センター年報 昭和62年度	富山県埋蔵文化財センター	1988年
金大考古 第15号	金沢大学文学部考古学研究室	1988年
長野県埋蔵文化財センター紀要 1	長野県埋蔵文化財センター	1987年
長野県埋蔵文化財ニュース No.23	長野県埋蔵文化財センター	1988年
長野県埋蔵文化財ニュース No.24	長野県埋蔵文化財センター	1988年
名古屋市博物館だより 第60号	名古屋市博物館	1988年
名古屋市博物館だより 第61号	名古屋市博物館	1988年
名古屋市博物館だより 第62号	名古屋市博物館	1988年
名古屋市博物館だより 第63号	名古屋市博物館	1988年
名古屋市博物館だより 第64号	名古屋市博物館	1988年
名古屋市博物館だより 第65号	名古屋市博物館	1988年
名古屋市博物館研究紀要 第11巻	名古屋市博物館	1988年
南山大学人類学博物館館報 第22号	南山大学人類学博物館	1987年
南山大学人類学博物館館報 第23号	南山大学人類学博物館	1987年
南山大学人類学博物館館報 第24号	南山大学人類学博物館	1988年

人類学博物館紀要 第9号	南山大学人類学博物館	1987年
人類学博物館紀要 第10号	南山大学人類学博物館	1988年
京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度	京都大学埋蔵文化財研究センター	1985年
京都府埋蔵文化財情報 第27号	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1988年
京都府埋蔵文化財情報 第28号	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1988年
京都府埋蔵文化財情報 第29号	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	1988年
文化財学報 第5集	奈良大学文学部文化財学科	1987年
昭和62年度和歌山市立博物館館報	和歌山市立博物館	1988年
和歌山市立博物館研究紀要 3	和歌山市立博物館	1988年
東大阪市文化財協会ニュース Vol. 3, No. 1	(財)東大阪市文化財協会	1987年
東大阪市文化財協会ニュース Vol. 3, No. 2	(財)東大阪市文化財協会	1988年
東大阪市文化財協会ニュース Vol. 3, No. 3	(財)東大阪市文化財協会	1988年
東大阪市文化財協会ニュース Vol. 3, No. 4	(財)東大阪市文化財協会	1988年
大阪市文化財情報 葦火 12号	(財)大阪市文化財協会	1988年
大阪市文化財情報 葦火 13号	(財)大阪市文化財協会	1988年
大阪市文化財情報 葦火 14号	(財)大阪市文化財協会	1988年

大阪市文化財情報 葦火 15号	(財)大阪市文化財協会	1988年
大阪市文化財情報 葦火 16号	(財)大阪市文化財協会	1988年
大阪市文化財年報 創刊号	大阪市教育委員会文化振興課	1987年
兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度	兵庫県教育委員会	1987年
岡山大学構内遺跡調査研究年報 5 1987年度	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	1988年
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第1号	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	1988年
倉敷考古館研究集報 第20号	倉敷考古館	1988年
広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報VI	広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会	1988年
山口大学構内遺跡調査研究年報VI	山口大学埋蔵文化財資料館	1987年
九州文化史研究所紀要 第33号(考古学関係抜刷集)	九州大学九州文化史研究施設	1988年
宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報 1987	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1988年
Usa site museum news No.17	大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	1988年
別府大学付属博物館だより No.29	別府大学付属博物館	1988年
大分市歴史資料館ニュース 1	大分市歴史資料館	1988年
大分市歴史資料館ニュース 2	大分市歴史資料館	1988年
鹿児島大学南科研資料センター報告		

特別号第2号 鹿児島湾	鹿児島大学南方科学研究委員会	1988年
鹿児島大学南科研資料センター報告 No.40	南方科学研究資料センター	1988年
鹿児島大学南科研資料センター報告 No.41	南方科学研究資料センター	1989年
沖縄県立博物館年報 No.21	沖縄県立博物館	1988年
沖縄県立博物館紀要 第14号	沖縄県立博物館	1988年
<b>調査報告書</b>		
釧路市桜ヶ岡2遺跡調査報告書	北海道釧路市埋蔵文化財調査センター	1988年
竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16	(助)茨城県教育財団	1987年
竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17	(助)茨城県教育財団	1988年
一般県道新川・江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書	(助)茨城県教育財団	1988年
上野塚古墳	(助)君津郡市文化財センター	1988年
宮脇遺跡	(助)君津郡市文化財センター	1988年
上ノ山遺跡	(助)君津郡市文化財センター	1988年
西萩原遺跡	(助)君津郡市文化財センター	1987年
野々間古墳	(助)君津郡市文化財センター	1987年
富士見台遺跡	(助)君津郡市文化財センター	1987年

富田遺跡群	(財)君津郡市文化財センター	1987年
林遺跡	(財)君津郡市文化財センター	1987年
念仏塚遺跡	(財)君津郡市文化財センター	1987年
江戸・仙台坂遺跡（Ⅰ）	立正大学文学部考古学研究室	1988年
法政大学多摩校地遺跡群Ⅲ －C・R地区－	法政大学	1988年
神奈川県埋蔵文化財調査報告 30	神奈川県教育委員会	1988年
神奈川県文化財調査報告書 第47集 厚木市山ノ上遺跡Ⅰ	神奈川県教育委員会	1988年
新戸遺跡	神奈川県立埋蔵文化財センター	1988年
草山遺跡Ⅰ	神奈川県立埋蔵文化財センター	1988年
相模原市新戸遺跡調査の概要	神奈川県立埋蔵文化財センター	1988年
金沢文庫遺跡	神奈川県立埋蔵文化財センター	1988年
横浜市金沢文庫遺跡調査の概要	神奈川県立埋蔵文化財センター	1988年
横浜市港北区公団篠原団地内貝塚資 料	中村若枝	1988年
海老名本郷遺跡（Ⅱ）	本郷遺跡調査団	1988年
海老名本郷遺跡（Ⅳ）	本郷遺跡調査団	1988年
海老名本郷遺跡（Ⅴ）	本郷遺跡調査団	1988年

七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘 調査概要(6) 黒河尺目遺跡	富山県埋蔵文化財センター	1988年
菅原遺跡	菅原遺跡調査会・奈良大学・考古学研究室	1982年
奈良市埋蔵文化財調査センター紀要	奈良市教育委員会	1987年
奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度	奈良市教育委員会	1988年
平城京東市跡推定地の調査VI 第8 次発掘調査概報	奈良市教育委員会	1988年
亀井北(その3)	(助)大阪文化財センター	1986年
城山(その3)	(助)大阪文化財センター	1986年
昭和58年度大阪市内埋蔵文化財包蔵 地発掘調査報告書	大阪市教育委員会・(助)大阪市文化財協会	1985年
昭和59年度大阪市内埋蔵文化財包蔵 地発掘調査報告書	大阪市教育委員会・(助)大阪市文化財協会	1986年
昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵 地発掘調査報告書	大阪市教育委員会・(助)大阪市文化財協会	1987年
史跡難波宮跡 -環境整備事業報告(4)-	大阪市教育委員会	1987年
鬼虎川の木質遺物 -第7次発掘調査報告書 第4冊-	(助)東大阪市文化財協会	1987年
鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告書	(助)東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員 会	1987年
神並遺跡II	東大阪市教育委員会・(助)東大阪市文化財協 会	1987年
神並遺跡III	東大阪市教育委員会・(助)東大阪市文化財協 会	1988年
若江遺跡第27次発掘調査報告	(助)東大阪市文化財協会	1988年



若江遺跡第35次発掘調査報告	(財)東大阪市文化財協会	1988年
待兼山遺跡Ⅱ	大阪大学埋蔵文化財調査委員会	1988年
小阪合遺跡(昭和59年度 第4次調査報告書)	(財)八尾市文化財調査研究会	1988年
桑原遺跡	兵庫県教育委員会	1986年
中井古墳群・中井鴨池窯跡	兵庫県教育委員会	1987年
平野大墓	兵庫県教育委員会	1987年
淡路・志知川沖田南遺跡	兵庫県教育委員会	1987年
庄境1号墳	兵庫県教育委員会	1987年
特別史跡 姫路城跡Ⅱ	兵庫県教育委員会	1987年
河津館址	兵庫県教育委員会	1987年
墓山古墳	兵庫県教育委員会	1987年
小路大町遺跡発掘調査報告書	兵庫県教育委員会	1987年
多利遺跡群発掘調査報告	兵庫県教育委員会	1987年
推定布勢駅家跡 小犬丸遺跡Ⅰ	兵庫県教育委員会	1987年
沢の浦古墳群	兵庫県教育委員会	1987年
宝林寺北遺跡	兵庫県教育委員会	1987年

青野ダム建設に伴う発掘調査報告書 (I)	兵庫県教育委員会	1987年
岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第 3冊 鹿田遺跡 I	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	1988年
草戸千軒町遺跡-第35・36次発掘調 査概要- 1986	広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	1988年
朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺 跡発掘調査報告書IV(海崎地区2)	島根県教育委員会	1988年
島根女子大学移転予定地内奥山遺跡 発掘調査報告書	島根県教育委員会	1988年
小田遺跡群 I	玖珠町教育委員会	1987年
都城市遺跡詳細分布調査報告書(市 内南部)	都城市教育委員会	1987年
下山田Ⅱ遺跡・和野トフル墓	鹿児島県教育委員会	1988年
長浜金久第Ⅱ遺跡	鹿児島県教育委員会	1988年
土浜ヤーヤ遺跡	鹿児島県教育委員会	1988年
鹿児島市文化財基本調査報告書	鹿児島市教育委員会	1988年
草野貝塚-宅地造成に伴う第1次・ 第2次緊急発掘調査報告書-	鹿児島市教育委員会	1988年
名山遺跡	鹿児島市教育委員会	1988年
上二月田遺跡	東市来町教育委員会	1988年
入来町内文化財分布調査概報(Ⅱ)	入来町教育委員会	1988年
一宇治城跡	伊集院町教育委員会	1988年

梅木渡瀬調査地区 下大原遺跡・松木田遺跡・永野遺跡	喜入町教育委員会	1988年
内門堀遺跡他3遺跡(松崎遺跡・小堀遺跡・下堂見遺跡・内門堀遺跡)	吹上町教育委員会	1988年
円妙ヶ堀遺跡・小松ノ尾遺跡・神ノ小野遺跡・薙山遺跡	枕崎市教育委員会	1988年
横尾遺跡・横尾山遺跡・中崎上遺跡	財部町教育委員会	1988年
赤尾遺跡・掛尾遺跡	末吉町教育委員会	1988年
堀内遺跡	末吉町教育委員会	1988年
神領地下式横穴群5号	大崎町教育委員会	1988年
前木場原遺跡	吾平町教育委員会	1988年
轟ヶ迫遺跡	大根占町教育委員会	1988年
出口遺跡	大根占町教育委員会	1988年
小牧遺跡・平六間伏遺跡	南種子町教育委員会	1988年
喜念原始墓・喜念クバンシャ遺跡・喜念クバンシャ岩陰墓	伊仙町教育委員会	1988年
前当遺跡	知名町教育委員会	1988年
フガヤ遺跡・田井等遺跡・羽知地間切番所跡遺跡・仲尾次上グシク遺跡	名護市教育委員会	1988年

# 付 編

- I. 鹿児島大学構内遺跡（郡元団地O-7区，郡元団地P-4・5区）におけるプラント・オパール分析結果
- II. 情報処理センター新営通信設備工事に伴う立合調査時出土遺物の紹介

# I. 鹿児島大学構内遺跡（郡元団地O-7区，郡元団地P-4・5区）におけるプラント・オパール分析

宮崎大学 藤原宏志

従来の調査で鹿児島大学構内（郡元団地）には古墳時代（成川式土器）以降の生産址の包蔵が確認されている。

本報ではO-7区とP-4・5区の試掘調査におけるプラント・オパール分析の結果について述べる。

## 1 試料および分析法

### 試料

分析試料は1988年3月O-7区で二地点，同年11月にP-4・5区で三地点で採取された計59点である。各資料は異物の混入，汚染を防ぐとともに一定容量の試料を採るため試掘孔壁で100cc採土円筒を鉛直方向に打ち込み採取された。

### 分析法

プラント・オパール分析はガラス・ビーズ定量分析法により宮崎大学農学部で行われた。

## 2 分析結果

二区五地点における分析結果は第29・30図に示すとうりである。図の見方は別に示した。

## 3 考察および結論

(1) O-7区No.2 トレンチで成川期の遺物包含層（4層下-5b層上）より上層でイネ（*Oryza sativa*）が多量に検出された。2層，3層は水田稲作の可能性が高く，4層および5a層で行われた稲作については水田作か畑作かを特定することは難しい。

5b層は腐植質を多量に含む層であり，この腐植の給源はタケ類（*Bambusaceae*）およびススキ（*Miscanthus*）である。5b層の上層で検出されるイネは随伴植生からみて畑作であったと推定される。6層でも少量のイネが検出されたが，5層からの落ち込みの可能性もあり6層堆積時に生産されたものとは断定し難い。6層の腐植質はススキに由来するものであるがイネは検出されなかった。

(2) O-7区No.1 トレンチでは2，3層でススキが検出されたがイネは認められなかった。

(3) P-4・5区No.1 トレンチでは2-7層の各層でイネが検出された。とりわけ，3層，5層では多量のイネが認められ随伴植生からみて水田稲作の可能性が高いと判断された。6層では多量のタケ類が，また7層から9層ではススキが検出されたがイネは認められなかった。

- (4) P-4・5区No.2トレンチでは2層-6層上部までイネが検出され2層と3層にピークが認められる。3j層は水田層と思われる。
- (5) 2層-4層上部までイネが検出される。それより下層では殆どプラント・オパールが認められなかった。
- (6) O-7区No.2トレンチの5層やP-4・5区No.1トレンチの8層などでキビ族 (Paniceae) 植物が多量に検出された。この族にはヒエ (Echinochloa) やアワ (Setaria) など重要な作物がふくまれており、この当時これらの作物が栽培されていたことも考えられる。

表1. 郡元団地O-7区におけるプラント・オパール定量分析結果

No.1 トレンチ 3/23 '88・サンプリング

層名	植物体乾重 (t/10a. cm)						
	イネ ( <i>O. sati.</i> )	イネ粃 (rice g.)	キビ族 ( <i>Pani.</i> )	キビ族種実 ( <i>Pani. seed</i> )	ヨシ ( <i>Phrag.</i> )	タケ亜科 ( <i>Bamb.</i> )	ウシクサ族 ( <i>Andoro.</i> )
2	0.000	0.000	2.536	1.152	1.441	0.100	2.320
3	0.000	0.000	3.126	1.419	0.000	0.000	1.589
4	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
5	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
8	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
9	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
10	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
11	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
14	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

No.2 トレンチ

	イネ ( <i>O. sati.</i> )	イネ粃 (rice g.)	キビ族 ( <i>Pani.</i> )	キビ族種実 ( <i>Pani. seed</i> )	ヨシ ( <i>Phrag.</i> )	タケ亜科 ( <i>Bamb.</i> )	ウシクサ族 ( <i>Andoro.</i> )
2	20.494	7.180	11.597	5.266	0.000	1.977	1.179
3	12.832	4.495	6.264	2.845	0.000	0.739	3.184
4	4.635	1.624	19.233	8.734	0.000	3.279	4.887
5b-1	10.091	3.535	35.891	16.298	0.000	17.652	7.904
5b-2	0.566	0.198	4.698	2.133	1.334	0.462	2.388
6	0.612	0.214	10.161	4.614	0.000	0.000	3.356
7	0.000	0.000	5.949	2.701	0.000	0.000	2.116
8	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.984
9	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.105	0.000

表2. 郡元団地P-4・5区におけるプラント・オパール定量分析結果

№1 トレンチ

層名	植物体乾重 (t/10a. cm)						
	イネ (O. sati.)	イネ粃 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani. seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
2a	14.942	5.235	0.000	0.000	0.000	0.938	3.393
2b	18.005	6.308	10.674	4.847	0.000	1.470	3.797
3	19.223	6.735	18.770	8.523	0.000	1.292	2.862
4	5.602	1.963	6.642	3.016	0.000	0.392	4.388
5	21.750	7.620	6.686	3.036	0.000	1.710	2.378
6-1	7.304	2.559	2.331	1.059	0.000	9.448	0.000
6-2	5.145	1.802	6.099	2.770	1.732	13.199	1.240
6-3	4.418	1.548	3.055	1.387	0.000	8.775	2.484
7	4.820	1.689	2.500	1.135	0.000	0.689	5.844
8-1	0.000	0.000	5.903	2.680	0.000	0.155	4.000
8-2	0.000	0.000	24.594	11.168	0.000	0.149	3.269
9	0.000	0.000	2.648	1.202	0.000	0.208	2.153

№2 トレンチ

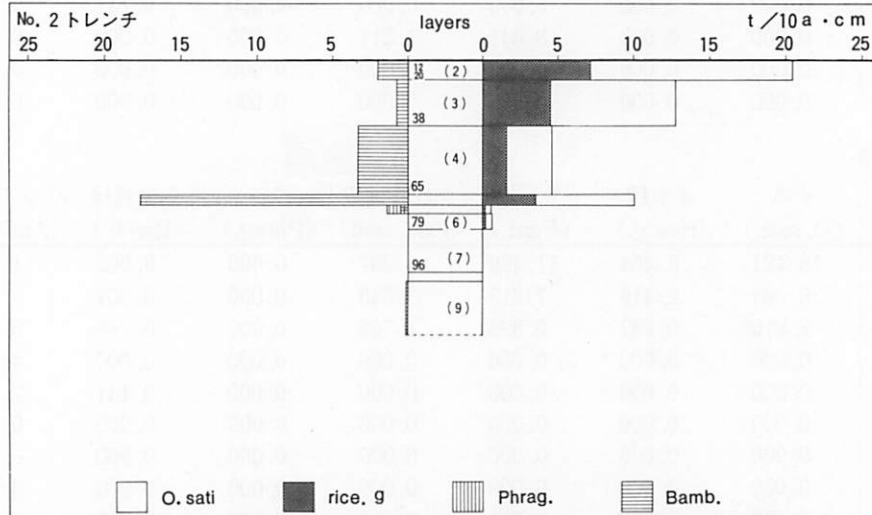
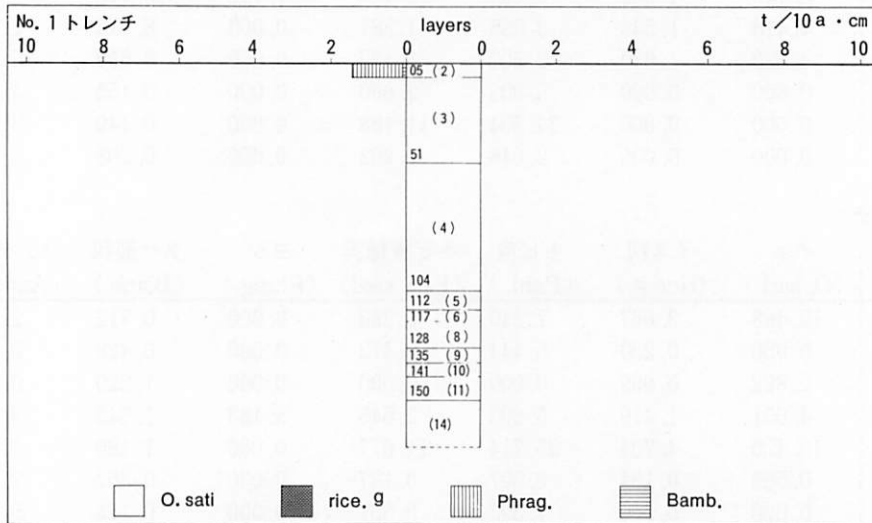
	植物体乾重 (t/10a. cm)						
	イネ (O. sati.)	イネ粃 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani. seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
2	10.468	3.667	7.240	3.288	0.000	0.712	2.576
3f	0.656	0.230	5.444	2.472	0.000	0.428	0.553
3g	2.822	0.989	0.000	0.000	0.000	1.229	0.793
3i	4.051	1.419	5.603	2.545	3.183	1.543	3.417
3j	13.426	4.704	25.714	11.677	0.000	1.180	4.356
4-1	0.555	0.194	6.907	3.137	0.000	0.362	2.574
4-2	0.000	0.000	7.392	3.357	0.000	0.145	5.635
4-3	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.247	4.782
5-1	0.000	0.000	3.341	1.517	0.000	0.000	0.340
5-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

№3 トレンチ

	植物体乾重 (t/10a. cm)						
	イネ (O. sati.)	イネ粃 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani. seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
2	18.421	6.454	11.466	5.207	0.000	0.602	1.165
3	6.904	2.419	7.813	3.548	0.000	0.307	5.030
4-1	2.816	0.987	3.896	1.769	0.000	0.766	5.543
4-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	4.099
4-3	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.131	2.715
5-1	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
5-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
6	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
7	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
8	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

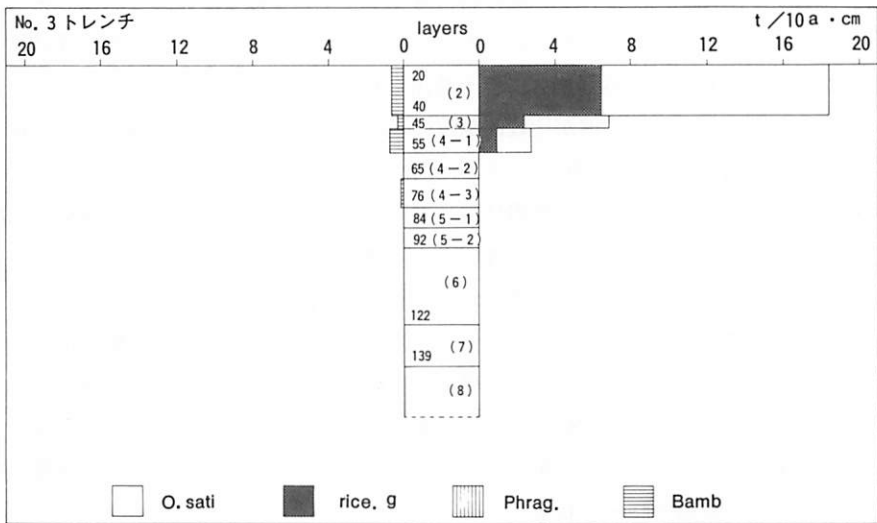
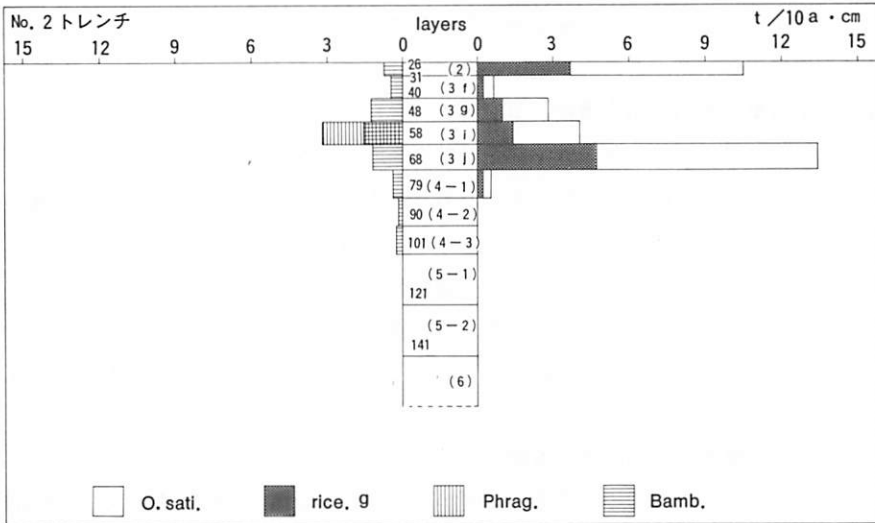
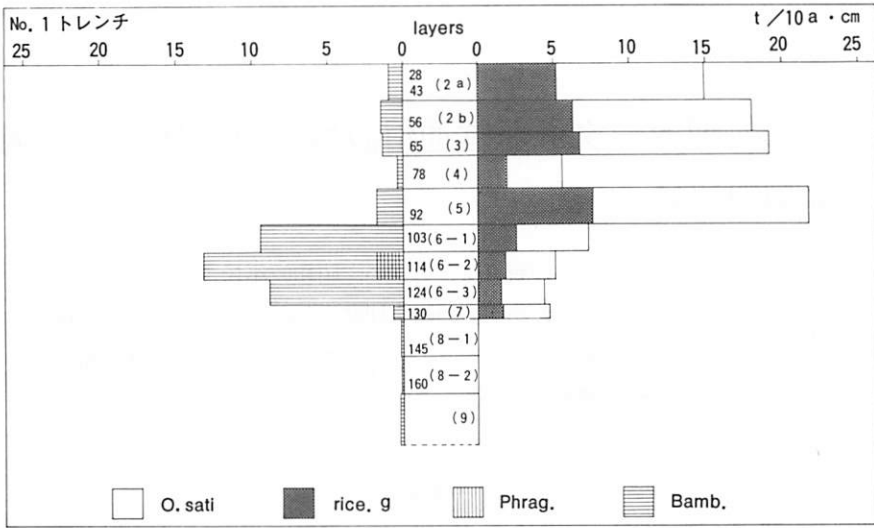
### 第29・30図のグラフの見方について

- layers: 採取地点の土層模式図。( )内の数字は土層番号, 左すみの小数字は表層からの深さをcmで表したものの。
- O. sati.: *Oryza sativa*, 栽培稲の地上部乾物重。  
rice. g.: *Oryza sativa*の穎果(穀)乾物重。  
Phrag.: *Phragmites communis*, ヨシの地上部乾物重。  
Bamb.: *Bambuseae*, タケ亜科の地上部乾物重。  
各植物体量はそれぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と土壌中から検出された各植物由来するプラント・オパール密度をもとに算出されたものである。
- 土柱模式図の右側に栽培植物, 同左側に野・雑草を示している。単位  $t/10a \cdot cm$  はその土層の厚さ1cm, 面積10a(1000㎡)に含まれるプラント・オパールの数から推定した各植物の乾物量を  $t$  (トン,  $1 \times 10^3g$ ) で表したものである。例えばその土層が10cmの厚みであると, グラフで示された値に10を乗じた量の植物体とその土層の堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量ではないことに注意されたい。
- 水田址が埋蔵されている土層ではO. sati.の値がピークを形成する場合が多い。土層の堆積状況により一概にいえないが, 水田址の層位はこのピークと一致するのが通例である。
- Phrag. (ヨシ), Bamb. (タケ)の乾物量変遷はその地点における土壌水分状況の時代的変遷を知るうえに役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に生育し, タケ(ササ)は比較的乾燥した環境下で繁茂する。両者の消長をみると, その地点の乾湿変化を推定できる。
- 再下段は遺跡名, 採取地点, 採取年月日を示す。



第29図 郡元団地0-7区におけるプラント・オパール定量分析結果グラフ





第30図 郡元団地P-4・5区におけるプラントオパール定量分析結果グラフ

## Ⅱ. 情報処理センター新営通信設備工事に伴う立合調査時出土遺物の紹介

鹿児島大学では情報処理センターの新営にともない、昭和62年10月から11月にかけて学内のほぼ全域にわたって通信設備工事を行ったが、この際に埋蔵文化財調査室においては新たな掘削が行われた地点において立合調査を実施している。この立合調査の結果については『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲ』において既に報告している。今回は、その際に果たせなかった立合調査時出土遺物の報告を行うものである。

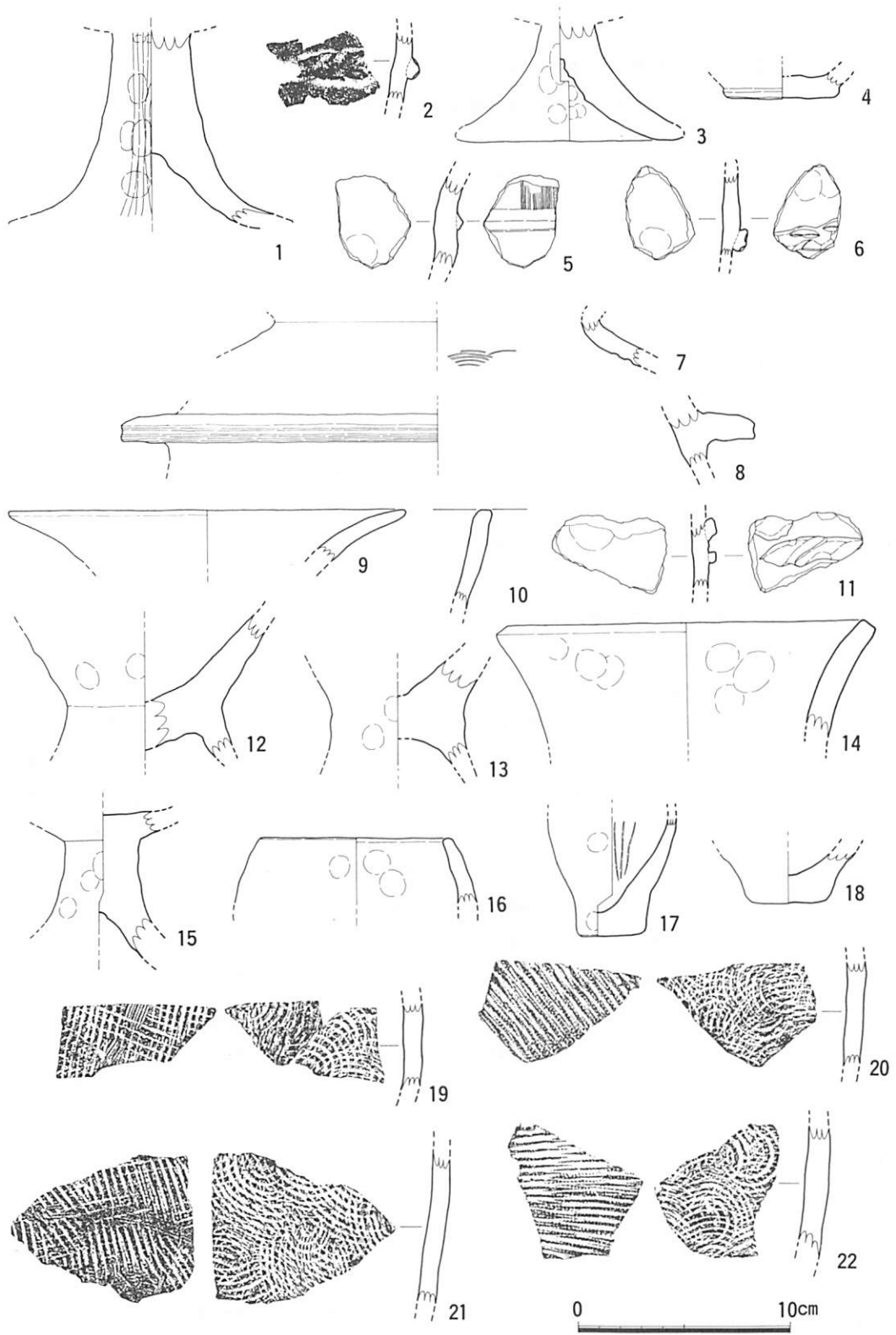
本立合調査においては、各地点において各種遺物が出土している。その概要については、『年報Ⅲ』を参照していただくこととし、ここでは図化可能な遺物について報告を行いたい。以下、工学部電子工学科東側・学生サークル棟東側・中央図書館北側・法文学部北側において行われた各工事で出土した遺物について、この順に地点ごとに紹介していく。

### ・電子工学科東側掘削部出土遺物（第31図1・2）

本地点においては、昭和51年の理学部2号館増築地内発掘調査の際に検出された河川跡に続くものと考えられる河川跡が検出されているが、第31図1の高坏脚部は河川内上部に堆積する砂層から出土したものである。坏部と脚端部を欠くもので、外面には幅2mm程のタテ方向のケンマが丁寧に施されている。内面はユビオサエの後、ナデ調整を施して仕上げている。脚部外面上方には、幅2～3cm程の黒斑が認められる。2は成川式土器の甕の突帯貼付部分で、器表外面が若干磨耗しているものの、いわゆる「絡縄突帯」が施されていることがわかる。内面はユビオサエの後、丁寧なナデ調整を施している。

### ・学生サークル棟東側掘削部出土遺物（第31図3～7）

本地点においては、昭和60年に実施した理学部3号館建設地内発掘調査によって検出された成川式土器包含層が、南側へ向かうにつれ漸移的に薄くなっていく様子が確認された。第31図3～7に示す土器も、本包含層から出土したものである。3は成川式土器の比較的小型の高坏脚部片で、脚端部を僅かに欠いている。内外面ともに若干磨耗している。ナデ調整によって両面とも仕上げているようであるが、ユビオサエの痕が比較的に明瞭に残っている。4は、土師器の坏底部片である。磨耗しているため、器面調整等は不明であるが、内面にはユビオサエの痕が、外面にはヨコナデ調整の痕が認められる。このタイプの土師器坏は、本地点北側の情報処理センター建設地内においてややまとまって出土している。5・6は、成川式土器甕の胴部突帯貼付部片である。5は口縁部が外方へ緩やかに開く器形を呈するものと思われ、断面が三角形を呈する突帯上にはヨコナデが施されている。また、突帯貼付部位より上部には何らかの工具によるタテ方向の調整痕が認められる。6は、断面が略方形の扁平な突帯を貼付した甕で、突帯の外面と下面には爪の圧痕が認められ、下方から突帯をつまんでアクセントを付けたことが考えられる。内外面ともに、ナデによって仕上げている。7は須恵器小片で壺の肩部に相当するものと考えられる。外面はヨコナデ調整が施され、内面には同心円の当て具痕が認められる。



第31図 出土土器(1) S = 1/3

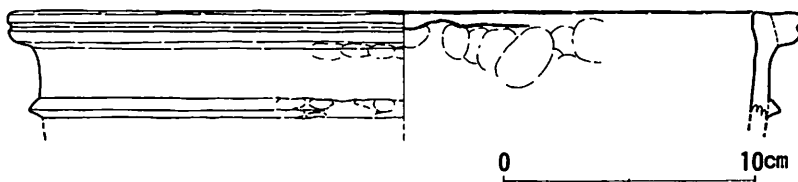
・中央図書館北側掘削部出土遺物（第31図8～22）

工事箇所は既掘部分に当たったが、攪乱層中から成川式土器や須恵器が多数出土している。8は小片のため器形などについては不明であるが、鐔状の突帯が周囲を巡るようである。鐔状突帯の上面には、ハケメが認められる。9は内外面とも明るい淡黄褐色を呈する小片で、器壁の厚さが若干薄い。高坏の滑らかなのにびる脚裾部片であろうか。10・11は、成川式土器甕の口縁部片である。11は甕の胴部突帯貼付部分に当たるが、突帯の始点と終点がすれちがっている状態が観察される。12・13は成川式土器甕底部付近の破片である。両者ともに脚部を欠く。12は、底部が下方へ若干くぼむ。14は、成川式土器壺の口縁部と考えられる破片で、口縁部が緩やかに外反する。15は、裾部を欠いた成川式土器の高坏脚部片である。外面には丹が塗られている。16は小型の鉢で、碗形を呈するようである。外面は若干磨耗しているが、内面にはヨコナデの痕が明瞭に残っている。17は小型の土器で、胴部が若干膨れた器形を呈する。おそらく平縁をなすものと考えられ、外面はユビオサエを施した後、丁寧なナデ調整を行っている。18は17とほぼ同様な器形を呈すると考えられる土器の底部片である。底径が若干17より大きく、底面から胴部下部にかけて黒斑が認められる。内外面共、若干磨耗している。19～22は須恵器小片であるが、おそらく大甕の破片であろう。いずれも外面に平行タタキ痕が、内面に同心円の当て具痕が認められる。

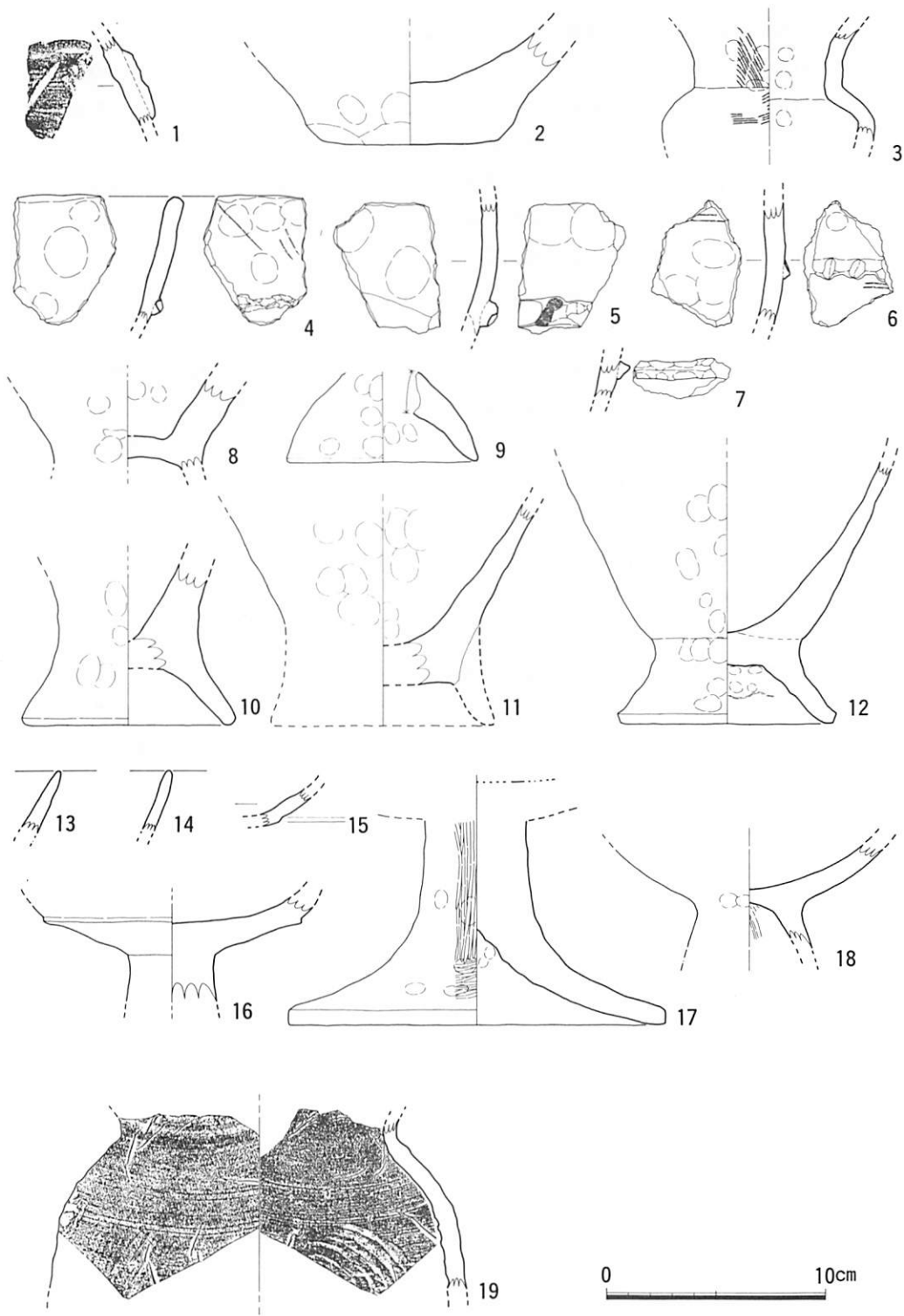
・法文学部北側掘削部出土遺物（第32図・第33図1～18）

本地点においては、地表下約70cmほどに存在する黒褐色粘質土層中から、土器が多数出土している。出土土器中には弥生土器も若干含まれるが、その主体は成川式土器である。

第32図の土器は、弥生時代中期の甕口縁部片である。胴部上方にはいわゆる「絡縄突帯」が貼付されている。口縁部上面及び内面にはユビオサエの痕が残っている。外面には突帯貼付前に横方向の丁寧なナデが施されている。また、外面には丹が塗られている。第33図1は、壺の肩部突帯貼付部片である。小型の土器であるらしく、器壁が薄く突帯の幅も狭い。突帯上には、二本の平行斜沈線が施されている。2は、壺の底部片である。底面周縁部には面取りを施したような平坦面部が形成されており、胴部外面には砂粒の移動も認められる。内面は磨耗しているため、調整等については不明である。3は、罎の口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部外面には若干右下がりのハケメが、肩部には横位のハケメが認められる。内面は丁寧なナデ調整が施されている。4は甕の口縁部片で、肩部に断面三角形突帯が貼付される。突帯はいわゆる「絡縄突帯」であるが、かなり雑な仕上がりである。外面には砂粒の移動した痕跡が明瞭に残っている。5も甕の口縁部片であるが、口縁端部を欠いている。肩部に貼付された断面「カマボコ」形の突帯上に施された刻み目内に



第32図 出土土器(2) S = 1/3



第33図 出土土器(3)  $S = \frac{1}{3}$

は、布目圧痕が認められる。6は甕の肩部片で、断面三角形の突帯を付している。7もおそらく甕の肩部に相当すると考えられる破片で、いわゆる「絡縄突帯」が施されている。8は甕底部片であるが、脚部を欠いている。9は器形など不明であるが、図においては仮に小型土器の脚部として表現している。しかし、図とは逆位で、手扶ねの小型碗形土器である可能性も高い。10は甕の底部片である。脚部分のみが残存している。11も甕底部片であるが、外面下方には脚部の剝離痕が明瞭に残っている。内面には長さ2cmほどの縦位の直線状の調整工具痕が点在している。内外面ともユビオサエの痕跡が横位に並び、粘土帯の接合部をよく示している。外面には黒斑が認められる。12は甕の胴部下半から脚部にかけての破片である。内外面ともにユビオサエの後にナデ調整を加えているが、外面のナデ調整は内面のそれに比べ若干雑である。そのため外面においてはユビオサエ痕が明瞭であるとともに、これらの調整に先立って行われている調整によって砂粒が移動している痕跡が明瞭に認められる。13・14は高坏坏部口縁端部片である。14は若干磨耗しているものの、両者とも外面は横位のケンマ（幅1.5mm）による丁寧な仕上げがなされている。また、外面には丹が塗られている。15は高坏坏部の底部から立ち上がり部への変換部に当たる部分である。変換部に段部が形成されている。16は高坏坏底部までの破片で、外面は丁寧なケンマによって仕上げられてあり、丹が全面に塗られている。17は高坏の脚部片で、現存部上部には坏部の底面がごく僅か残存している。筒部には縦位の、裾部には横位のケンマ（幅約4mm）が施され、内面には黒斑が全面に拡がっている。18は全形は不明であるが、おそらく脚部を付した碗形の鉢かと考えられるものである。脚部内面を除いて調整は比較的丁寧で、器面はナデ調整によって平滑に仕上げられている。19は須恵器壺の肩部を中心とした破片である。器形はおそらく長胴平底で、口縁部がやや短く緩やかに外反するものと考えられる。胴部外面には平行タタキの痕跡が、内面には同心円の当て具痕が認められる。内外面ともにヨコナデによって仕上げられている。

## 図 版

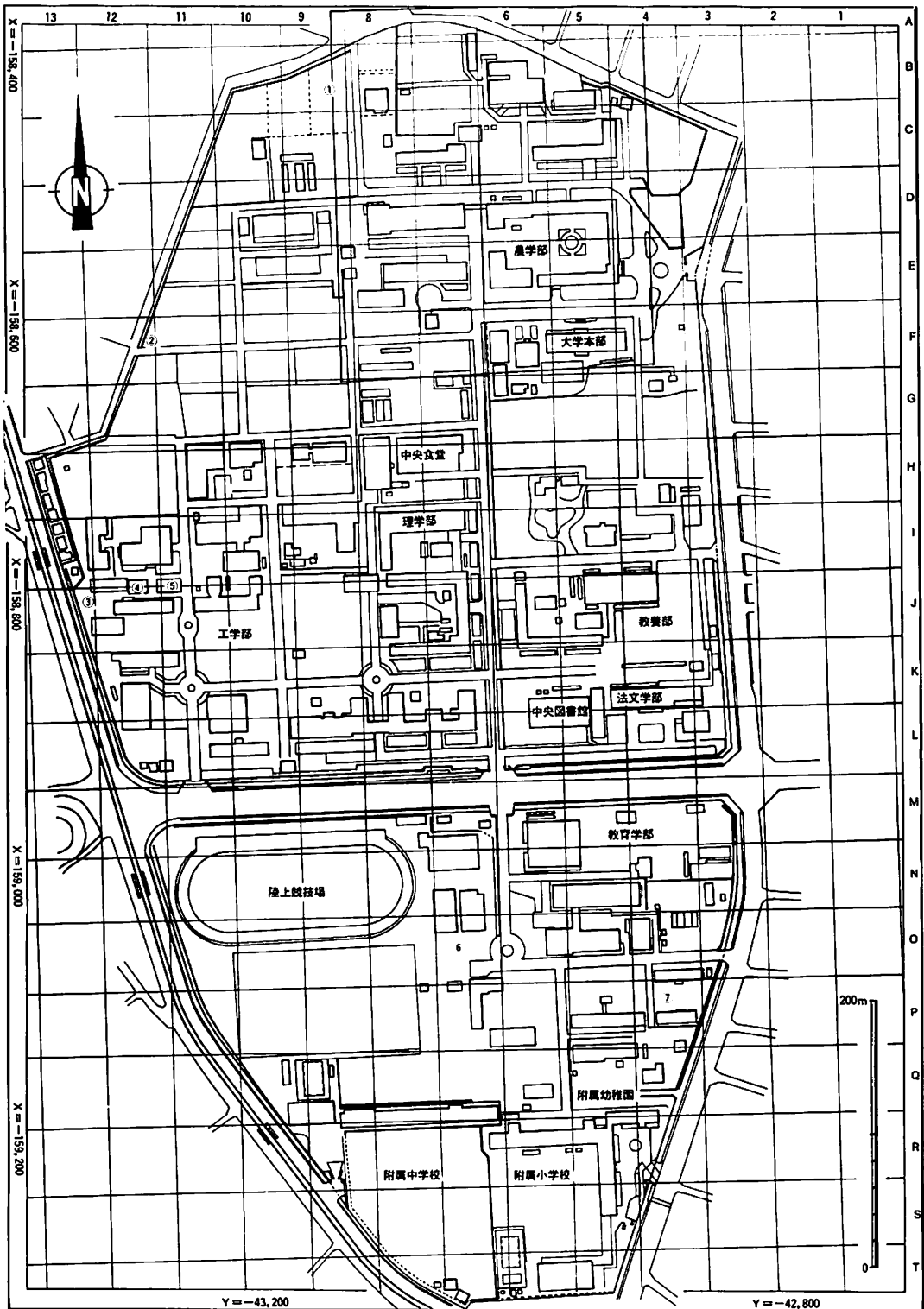
1. 鹿児島大学郡元団地構内図
2. 鹿児島大学宇宿団地構内図
3. 郡元団地O-7区における試掘調査
4. 郡元団地P-4・5区における試掘調査(1)
5. 郡元団地P-4・5区における試掘調査(2)
6. 宇宿団地E-8区における試掘調査
7. 昭和63年度立合調査
8. 情報処理センター新営通信設備工事に伴う立合調査(1)
9. 情報処理センター新営通信設備工事に伴う立合調査(2)







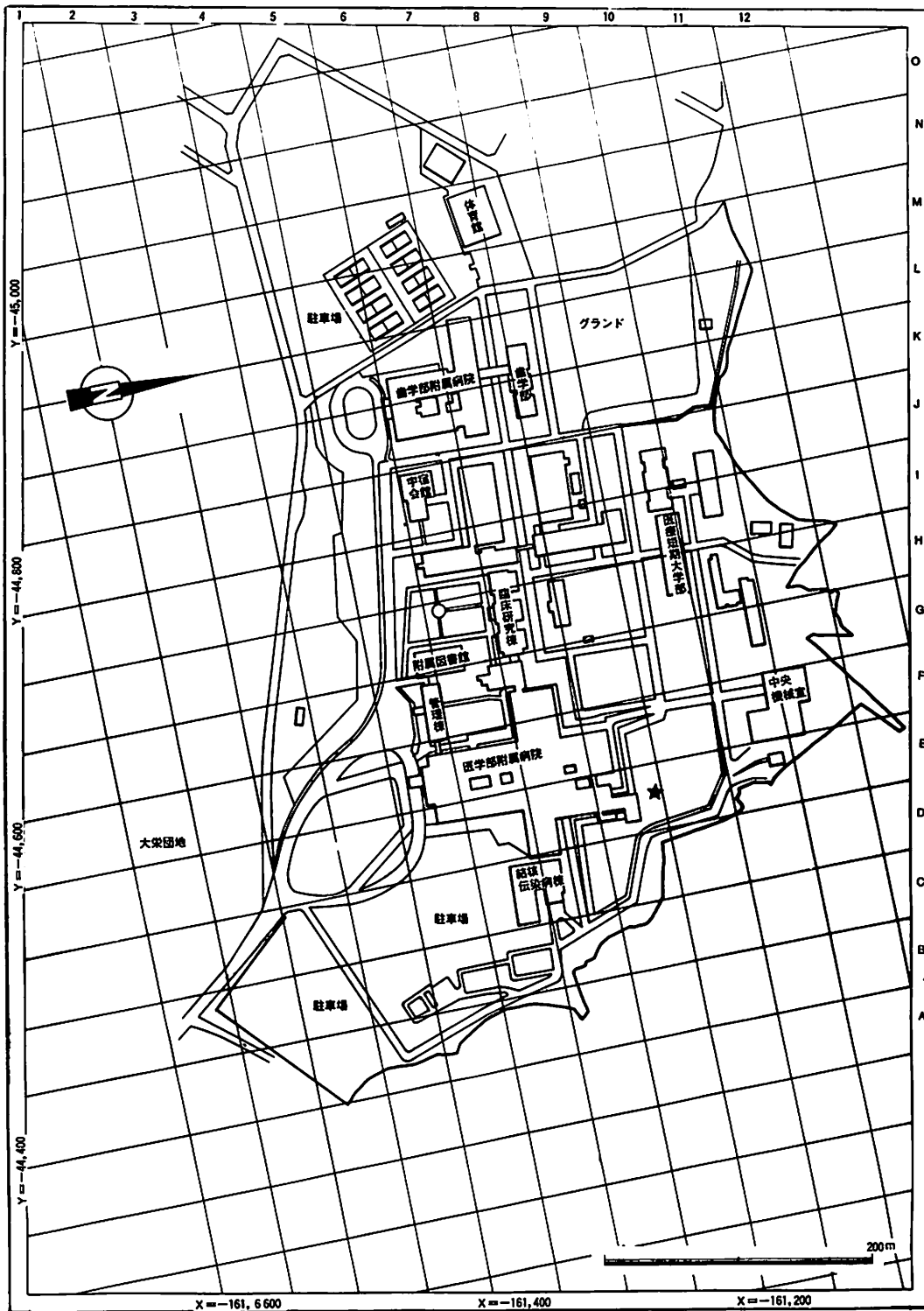
図版1 鹿児島大学郡元団地構内図 (1/5000)



- ① 農学部電気幹線整備工事に伴う立合い調査地点 (□内・第24図参照)
- ② 郡元地区自家給水施設改修工事に伴う立合い調査地点
- ③ 工学部焼却場整備工事に伴う立合い調査地点
- ④ 工学部岩崎與八郎氏胸像台座工事に伴う立合い調査地点
- ⑤ 農学部農学科等消火栓設備改修工事に伴う立合い調査地点
- ⑥ 郡元団地0-7区(教育学部福利厚生施設建て替え予定地) 試掘調査地点
- ⑦ 郡元団地P-4・5区(教育学部教育実践研究指導センター及び美術・音楽科棟建設予定地) 試掘調査地点

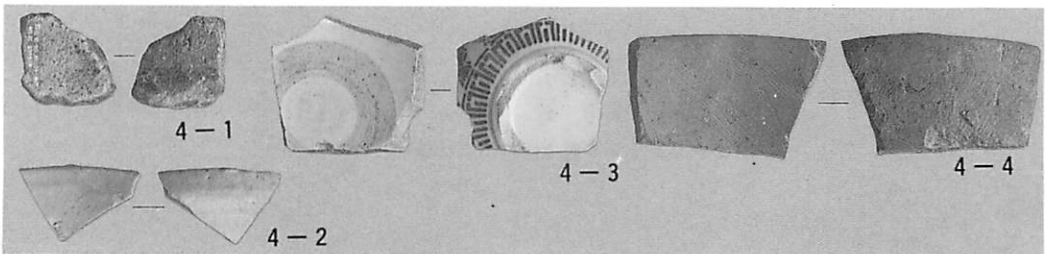
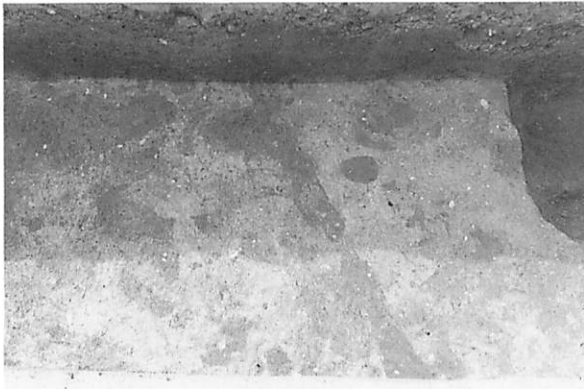
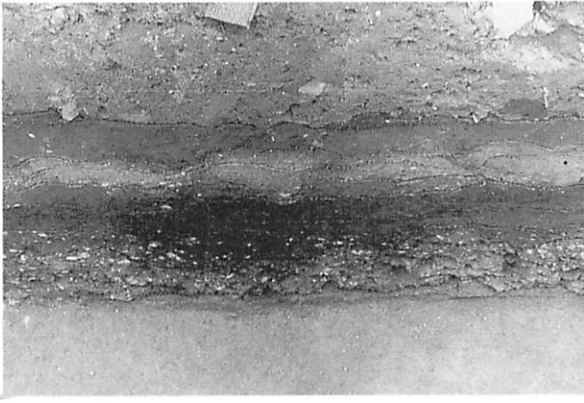
図版2 鹿児島大学宇宿団地構内図

1/5000



★ 宇宿団地E-8区 (医学部附属病院MRI-CT棟建設予定地) 試掘調査地点

図版 3  
郡元団地0-7区における試掘調査



③	①
④	②
⑤	
⑥	

① No. 1 トレンチ東壁土層

③ No. 3 トレンチ北壁中央部土層

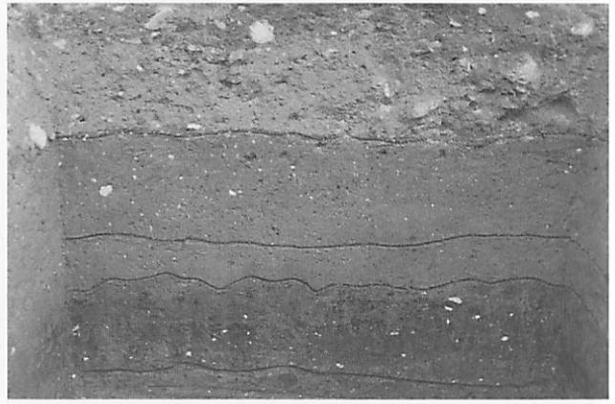
⑤ プラント・オパール分析資料採取状況

② No. 2 トレンチ北壁深掘り部土層

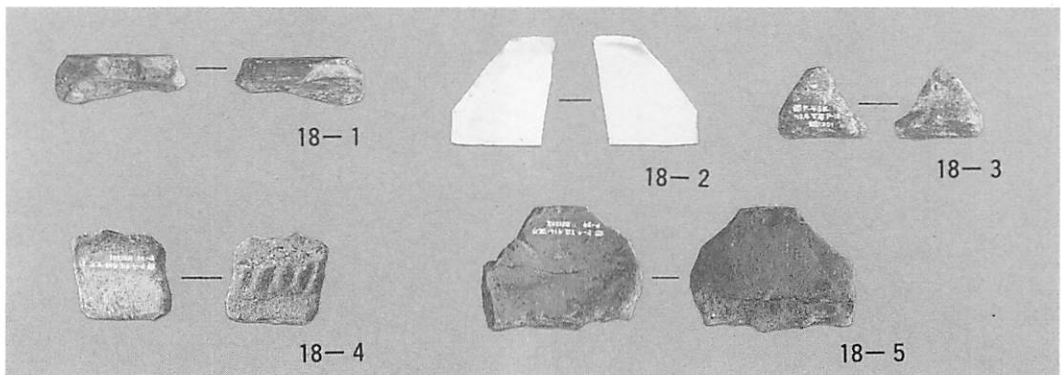
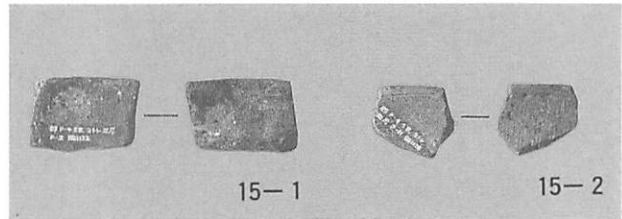
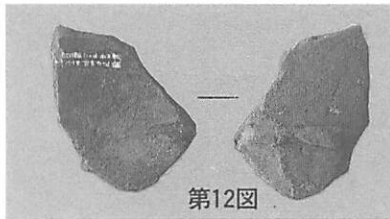
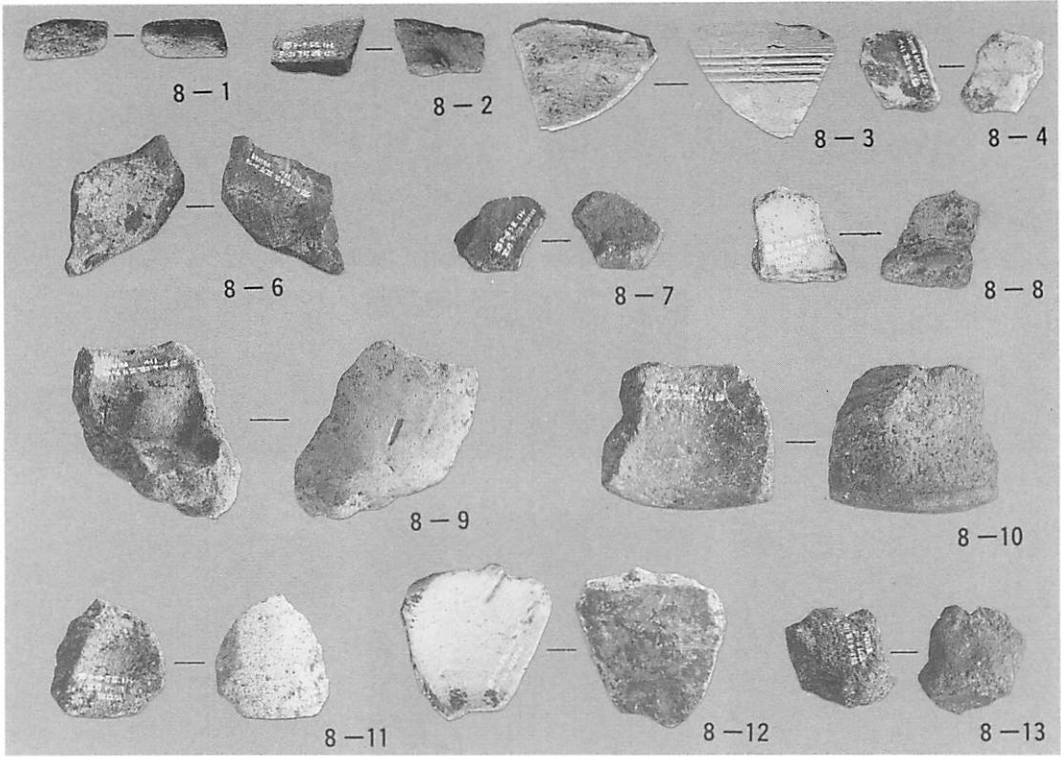
④ No. 3 トレンチ第3層上面検出溝状遺構

⑥ 出土土器

図版 4 郡元団地P-4・5区における試掘調査(1)



- |                         |  |   |  |
|-------------------------|--|---|--|
| <p>①</p> <hr/> <p>②</p> | <p>③</p> <hr/> <p>④</p> <hr/> <p>⑤</p> | <p>① No. 1 トレンチ東壁</p> <p>③ No. 4 トレンチ東壁</p> <p>⑤ No. 4 トレンチ第6層上面検出溝状遺構・ピット列</p> | <p>② No. 3 トレンチ東壁</p> <p>④ No. 2 トレンチ硬質土上面検出溝状遺構</p> |
|-------------------------|--|---|--|



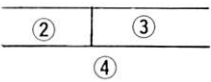
①

① No. 1 トレンチ出土土器

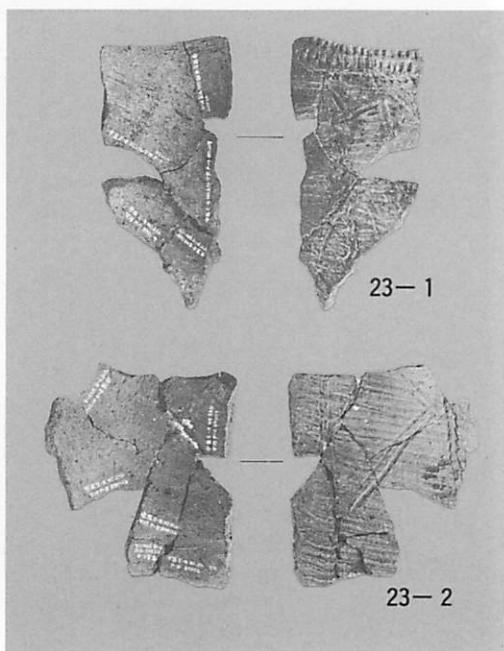
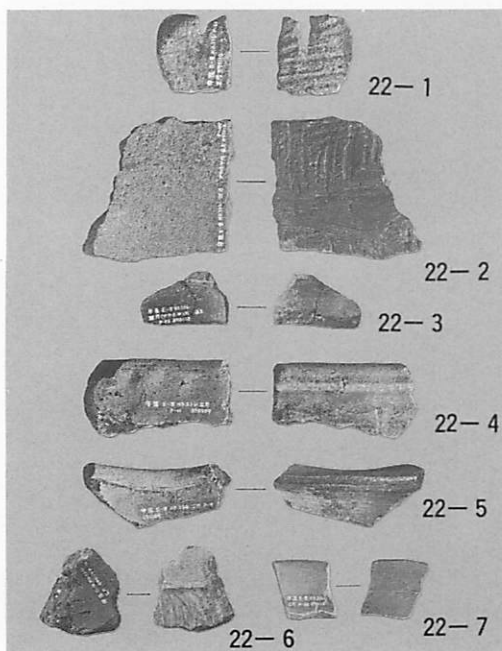
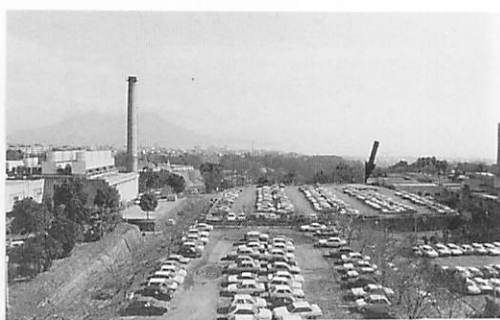
② No. 2 トレンチ出土土器

③ No. 3 トレンチ出土土器

④ No. 4 トレンチ出土土器



図版6 宇宿団地E-8区における試掘調査



①	②
③	④
⑤	⑥
⑦	⑧

① 調査区近景

② 調査区遠景

③ No. 1 トレンチ西壁土層

④ No. 2 トレンチ南壁土層

⑤ No. 2 トレンチ第5層遺物出土状況

⑥ 第2・3層出土土器

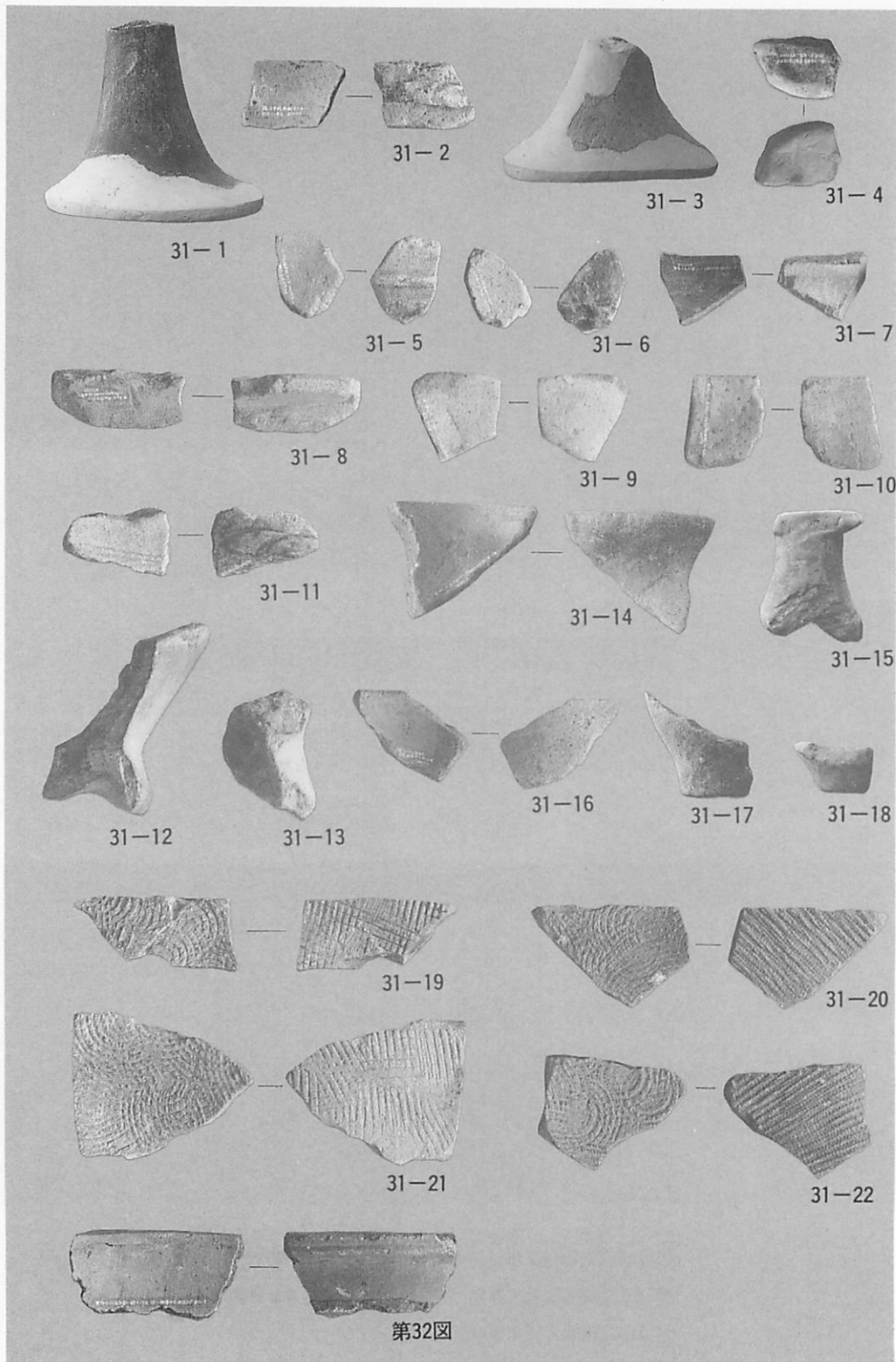
⑦ 第5層出土土器



図版7 昭和63年度立合調査



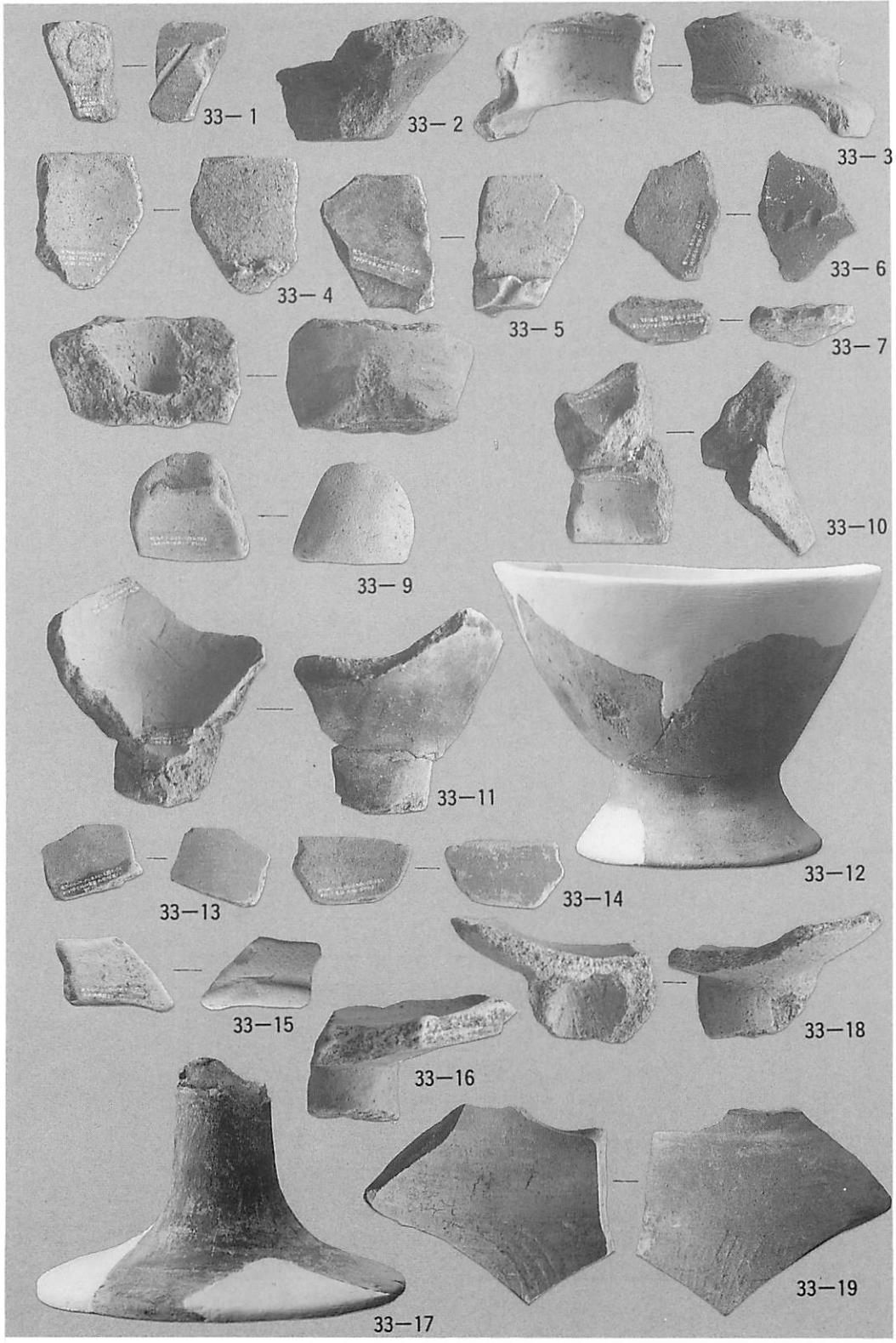
- |   |   |                       |                  |
|---|---|-----------------------|------------------|
| ④ | ① | ① 農学部電気幹線工事C地点土層      | ② 農学部電気幹線工事L地点土層 |
|   | ② | ③ 農学部消火栓改修工事No. 4地点土層 | ④ 工学部焼却場立合時観察土層  |
| ⑤ | ③ | ⑤ 農学部消火栓改修工事状況        |                  |



第32図

出土土器(1)





出土土器(2)

鹿兒島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅳ

1989年3月

編集 鹿兒島大学埋蔵文化財調査室

発行 鹿兒島市郡元一丁目21-24

印刷 (有)朝日印刷

鹿兒島市上荒田町854-1